

# 法政大学 国際日本学研究所

Hosei University Research Center  
for International Japanese Studies

## *The Newsletter*



No.19 Mar.2014



### C O N T E N T S

シンポジウム報告	0
研究会報告	00
ワークショップ報告	00
東アジア文化研究会報告	00
勉強会報告	00
刊行案内	00

2013年10月18日(金)～20日(日)

国際シンポジウム

「日本とは何か—日本民族学の20世紀

—鳥居・澁澤・梅棹・佐々木」

法政大学市ヶ谷キャンパス 九段校舎3階 第一会議室

2013.4～2013.10活動報告

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）  
国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討—〈日本意識〉の過去・現在・未来  
アプローチ②「近代の〈日本意識〉の成立—日本民俗学・民族学の問題」

## 国際シンポジウム

# 日本とはなにか—日本民族学の 20 世紀

## —鳥居・澁澤・梅棹・佐々木

- 日 時：2013 年 10 月 18 日（金）～20 日（日）
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 九段校舎 3 階 第一会議室
- 司 会：ヨーゼフ・クライナー（法政大学国際日本学研究所客員所員）

法政大学国際日本学研究所の「国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉再検討—〈日本意識〉の過去・現在・未来」プロジェクトのアプローチ②「近代の〈日本意識〉の成立—日本民俗学・民族学の問題」では、2013 年 10 月 18 日（金）から 20 日（日）の 3 日間にわたり、国際シンポジウム「日本とはなにか—日本民族学の 20 世紀—鳥居・澁澤・梅棹・佐々木」を法政大学九段校舎 3 階第一会議室で開催した。今回は日本国内と韓国及びドイツを含む研究者 15 名の発表があり、一般参加者 167 名の聴講があった。

このプロジェクト採択に先立つ段階で、大森貝塚の発掘を行った小シーボルトと日本民族学・考古学の黎明、また、柳田國男の『後狩詞記』の民俗学の草分け的評価について国際シンポジウムを開催し、その成果は二冊の報告書にまとめられた。プロジェクト採択当初の 2 年目までは、昭和 10 年代から 20 年代にかけての時期に絞って民俗学と民族学の両みんぞく学のパラダイムの変化を議論してきた。この時期の日本は、戦前の大日本帝国及び植民地国家から戦後の単一民族国家へと変わった。この歴史的なプロセスで両みんぞく学のパラダイムがどのように変化してきたのか、また、「日本」という意識はどう変化したのかという重大な研究課題を検討し、その研究成果を報告書『近代〈日本意識〉の成立』として刊行することができた。

プロジェクト 3 年目には、日本民族学の生みの親ともいわれる岡正雄の業績を取り上げ、いくつかの研究會、国際シンポジウムで議論した。この研究では、両みんぞく学だけでなく、考古学、言語学、社会人類学といった隣接諸分野も取り上げ、報告書『日本民族学の戦前と戦後—岡正雄と日本民族学の草分け』にまとめられた。今年度のシンポジウムでは、20 世紀の民族学ないし文化人類学の発展と最も深い関わりがある四人の先駆者の業績を取り上げて議論した。その際、韓国の研究者の最近の調査・研究成果にも注目し、もう一名、金閔丈夫という自然人類学者も視野に入れた。

鳥居龍蔵（1870-1953）は、生涯を通じてアジア中心に幅広い実地調査を行った研究者として知られている。北は千島アイヌ、樺太、シベリア東部、南は台湾、西南中国、田代安定、伊波普猷と接触しながら沖縄を、そして 1905 年以降は幾度ももわたり朝鮮半島、満州、中国北部の河北の調査を重ねた。特に考古学、宗教、神話の面において日本との比較を行った。鳥居の重大な成果は、日本文化は少なくとも南と北の二つの影響を受けて成立したという見解であった。岡正雄は、鳥

居から比較の手法、考古学の成果を文献と照合する方法を受け継いだのではないかとみられる。

次に取り上げた澁澤敬三（1896-1963）は、日本の近代化に大きく貢献した澁澤栄一の孫として、経済界の指導者および実業家として大きな業績を残している。しかし、民俗学、民族学の研究分野でも大きく活躍したことも見逃すことはできない。澁澤の残した業績の中でも特に重要な点は二つある。一点目は、文字を中心とした文献学的研究にモノという新しいカードを入れた、日本の物質文化の研究の開拓者であったことで、アチックミュージアムで収集した民具は後に民族学協会附属博物館（保谷）を経て国立民族学博物館の基礎となっている。すなわち、澁澤は現在、諸外国で行われている日本研究のパラダイムシフト、ビジュアルターンの 50 年、60 年前の先駆けであった。二点目は、澁澤が学際的ないし共同研究の重要性を常に強調したことである。その点で、日本民族学会の設立と同時に人類学会との連合大会の開催を進め、戦後には九学会連合を設立し、その調査と研究に深く関わってきた。こういった日本の動向は、外国で行われていた日本研究においても注目を集めた。ウィーン大学が組織した阿蘇地方の学際的共同研究はその好例の一つである。

梅棹忠夫（1920-2010）は、非常に細かい実地調査のフィールド・ノートを残した研究者として知られているが、日本文明を新しい観点から見つめ、西洋と比較した大きなビジョンを展開した代表的な日本の研究者である。この文明学の確立と発展のために、昭和 32 年に発表した「文明の生態史観序説」という基礎的な意味をもつ論文以降、主に昭和 58 年から 17 回にわたって国立民族学博物館で開催した谷口国際シンポジウムの文明学部門の席で、アメリカ、ヨーロッパをはじめアジア、オーストラリアの研究者と一緒に議論した。また、国立民族学博物館の設立者・初代館長としての業績も忘れることはできない。

金閔丈夫（1897-1983）は自然人類学者であり、戦前は台北帝国大学で活躍し、雑誌『民俗台湾』の紙面上で大東亜民俗学の可能性を展開した。これを取り上げ、法政大学の川村湊をはじめ、最近 20 年にわたって厳しい金閔批判が行われた。それに対して、ソウル国立大学校の全京秀は、当時の学問がおかれていた厳しい状態を指摘し、むしろ金閔の努力を認めるべきだと強調した。

佐々木高明（1929-2013）は京都出身の地理学者で、焼畑農業の比較研究で日本国内をはじめ、中国、東南アジア、インドなど広い地域において細かく調査を重

— タイムテーブル —

10月18日(金)	13:00～13:15	挨拶	安孫子 信 (法政大学国際日本学研究所 所長)
	13:15～13:30	趣旨説明	Josef Kreiner ヨーゼフ・クライナー (法政大学 客員所員)
	<b>鳥居龍蔵をめぐる</b>		
	13:30～14:15	「鳥居龍蔵の見た北辺の民族の交流と境界」	齋藤 玲子 (国立民族学博物館 助教)
	14:15～15:00	「鳥居龍蔵の千島研究とその後の展開」	手塚 薫 (北海道学園大学 教授)
	15:00～15:30	休憩	
	15:30～16:15	「鳥居龍蔵・岡正雄・馬場脩の記録にみる樺太アイヌの竪穴住居利用について」	田村 将人 (札幌大学 特命准教授)
	16:15～16:45	コメント「鳥居龍蔵」	佐々木 史郎 (国立民族学博物館 教授)
	16:45～17:30	Torii Ryūzō: His Anthropology and Influence on Oka Masao's Theories. 「鳥居龍蔵の人類学が岡正雄の学説に及ぼした影響」	Hans Dieter Olschleger ハンス・ディーター・オイルシュレーガー (ボン大学 准教授)
	17:30～18:00	討論	
10月19日(土)	<b>澁澤敬三をめぐる</b>		
	10:00～10:15	挨拶・趣旨説明	Josef Kreiner ヨーゼフ・クライナー (法政大学 客員所員)
	10:15～11:00	「澁澤敬三が組織する共同研究—昭和9年薩南十島調査を事例に」	小林 光一郎 (神奈川大学 特別研究員)
	11:00～11:30	「澁澤敬三の学際的アプローチとそのヨーロッパに及ぼした影響」	Josef Kreiner ヨーゼフ・クライナー (法政大学 客員所員)
	11:30～12:00	討論	
	12:00～13:00	休憩	
	<b>梅棹忠夫をめぐる</b>		
	13:00～13:45	「日本民族=文化の多元論と一元論」	清水 昭俊 (国立民族学博物館 名誉教授)
	13:45～14:30	「梅棹忠夫と谷口シンポジウム『文明学部門』—その軌跡と意義」	中牧 弘充 (国立民族学博物館 名誉教授)
	14:30～15:15	Umesao on Comparative Eco-History and Modernization of Japan. 「梅棹忠夫の比較文明の生態史観と日本文化の近代化」	Christoph Antweiler クリストフ・アントワイラー (ボン大学 教授)
15:15～15:45	休憩		
15:45～16:30	「梅棹忠夫の山岳部ネットワーク」	中生 勝美 (桜美林大学 教授)	
16:30～17:15	「梅棹忠夫のフィールド・ワーケルノートからカードへの整理に焦点をあてて」	小長谷 有紀 (国立民族学博物館 教授)	
17:15～18:00	討論		
10月20日(日)	<b>佐々木高明をめぐる</b>		
	10:00～10:30	挨拶・趣旨説明	Josef Kreiner ヨーゼフ・クライナー (法政大学 客員所員)
	10:30～11:15	「植民地台湾における金関丈夫の再評価—帝国の検閲とゆえなき誹謗を越えて」	CHUN Kyung-soo 全 京秀 (ソウル国立大学 教授)
	11:15～12:00	「縄文時代へのまなざし—佐々木高明と特別研究「日本民族文化の源流」」	小山 修三 (国立民族学博物館 名誉教授 / 千里文化財団 理事長)
	12:00～13:00	休憩	
	13:00～13:30	コメント「照葉樹林文化論」	秋道 智彌 (総合地球環境学研究所 名誉教授)
	13:30～14:00	コメント「ナラ林文化論」	佐々木 史郎 (国立民族学博物館 教授)
	14:00～15:00	討論	

# シンポジウム報告

ね、その成果として植物学者の中尾佐助と一緒に「照葉樹林文化」を日本文化の源流とした学説を打ち出した。これは現在でも定説で、主に考古学の世界で調査・研究が進められている。また、南からの日本文化と同じように、北のほうからの「ナラ林文化」が影響した可能性も視野に入れ、アイヌ文化研究と接触し始めた。

このシンポジウムの数々の重要な発表と討論を簡単にまとめると、日本文化の多元的起源の学説の流れ（鳥居、岡、金関、佐々木）に対して、日本文化を一元的なものとして取り扱ってきた学説（柳田國男、石

田英一郎、全く違った観点から梅棹）の二つの学説の流れを、20世紀を通じて出された「日本意識の形成」という問いかけに答えるパラダイムとしてみなければならぬという結論に至った。

なお、シンポジウムでの発表と討論についてまとめた報告書を2013年度内に刊行する予定である。

【記事執筆：ヨーゼフ・クライナー

（法政大学国際日本学研究所客員所員）】



清水 昭俊 氏（国立民族学博物館名誉教授）



クリストフ・アントワイルー 氏（ボン大学教授）



中牧 弘允 氏（国立民族学博物館名誉教授）



中生 勝美 氏（桜美林大学教授）



小長谷 有紀 氏（国立民族学博物館教授）



全 京秀 氏（ソウル国立大学校教授）



（左）佐々木 利和 氏（北海道大学教授）  
（右）ヨーゼフ・クライナー 氏（法政大学客員所員）



佐々木 史郎 氏（国立民族学博物館教授）

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)  
“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”

Research Approach 2 “Establishment of Modern ‘Japan-consciousness’, Contributions from Ethnology and Folklore studies”

### International Symposium

## What Is Japan? Ethnology in the 20th Century: Torii, Shibusawa, Umesao and Sasaki

Date: Friday, 18 October – Sunday, 20 October 2013  
Venue: Hosei University Ichigaya Campus Kudan Schools 3rd Floor Conference Room I  
Chair: Josef Kreiner (Visiting Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

The international symposium, “What Is Japan? Japanese Ethnology in the 20th Century”, featured five scholars who have made important contributions to scholarly devel-

opment, in the fields of ethnology and anthropology from Meiji to the present day. Presentations from fifteen researchers from Japan and overseas were heard, and discussed.

Torii Ryuzo carried out extensive fieldwork in East Asia, and as a result of his comparative research of archaeology and mythology, he proposed the theory that Japanese national culture is created from two different streams. This was developed by Oka Masao, and Sasaki Komei, who called himself “the last historical ethnologist” and who proposed the “Culture of the broad leaf forest” and the “Culture of the oak forest”, from which recent theories have developed. Shibusawa Keizo did research in the fields of material culture and collections, and also advanced collaborative academic research. Umesao Tadao, founder of the National Museum of Ethnology, held an extremely unique vision of Japanese civilisation, and carried out comparison with Western Europe.

We anticipate publishing the results of this symposium in a report within the year.

Report by: Josef Kreiner (Visiting Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

战略研究基础形成支援项目 研究方法②“近代‘对日认识’的形成”

国际研讨会

## 日本是什么—日本民族学的二十世纪— 鸟居·澁泽·梅棹·佐佐木

日期: 2013年10月18日(星期五)~20日(星期日)  
会场: 法政大学市谷校区 九段校舍3层 第一会议室  
主持: Josef Kreiner (法政大学国际日本学研究所客座所员)

在此次题为“日本是什么—日本民族学的二十世纪”的国际研讨会上,来自日本国内外的15名研究人员作了发言和讨论。其对象为从明治时期至今,在日本民族学和文化人类学领域取得重大研究成果,并对该领域的发展做出巨大贡献的5名学者。

鸟居龙藏(Torii Ryuzo)在东亚范围内做了广泛的

实地调查,作为考古学与神话的比较研究成果,他提出了日本民族文化是由两种不同的流派而组成的说法。冈正雄(Oka Masao)将此学说进行了进一步发展,而自称为“最后的历史民族学者”的佐佐木高明(Sasaki Komei)则以“照叶树林文化”与“榊林文化”的形式,将此学说发展为定论。澁泽敬三(Shibusawa Keizo)在物质文化研究及收藏领域取得研究成果,并推动了学界间的共同研究。作为国立民族学博物馆设立者的梅棹忠夫(Umesao Tadao)则将独特的日本文明构想与西欧之间进行了比较。

此次研讨会的成果,预定在年内以报告书的形式出版发行。

【执笔者: Josef Kreiner

(法政大学国际日本学研究所客座所员)】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업 (2010년 ~ 2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식> 재검토—<일본의식>의 과거·현재·미래  
연구② 근대 <일본의식>의 성립

국제심포지엄

## 일본이란 무엇인가—일본 민족학의 20세기—도리이·시부사와·우메사오·사사키

일시: 2013년 10월 18일(금)~20일(일)  
장소: 호세이(法政)대학교 이치가야 캠퍼스 구단 교사 3층 제1회의실  
사회: 요셉 클라이너(호세이대학교 국제일본학연구소 객원연구소원)

국제심포지엄 ‘일본이란 무엇인가—일본 민족학의 20세기’에서는 메이지(明治·1868~1890)시대 이후 현재에 이르기까지 일본 민족학, 문화인류학 분야에서 중요한 업적을 남기고 이 학문의 발전에 크게 공헌한 5명의 연구자를 중심으로, 15명의 국내외 연구자가 발표하

고 토론하였다.

동아시아에서 광범위한 현지조사를 벌인 도리이 류조(鳥居龍藏)는 고고학, 신화의 비교 연구 성과로서 일본의 민족문화는 두 개의 다른 흐름에서 이루어졌다는 설을 내세웠다. 이 설을 오카 마사오(岡正雄)가 전개시켰고, 자칭 ‘최후의 역사민속학자’ 사사키 고메이(佐々木高明)가 ‘조엽수림문화’(照葉樹林文化)와 ‘나라산림문화’(ナラ林文化)라는 최근의 정설로 발전시켰다. 시부사와 게이조(澁澤敬三)는 물질문화 연구와 수집 분야에서 업적을 남겼으며, 또한 학제적 공동연구를 추진하였다. 국립민족학박물관의 설립자인 우메사오 다다오(梅棹忠夫)는 매우 독특한 일본 문명에 대해 비전을 가지고 서유럽 문명과 비교하였다.

이 심포지엄의 성과는 이번년도 내에 보고서로 간행할 예정이다.

【기사집필: 요셉 클라이너

(호세이대학 국제일본학연구소 객원연구소원)】

# シンポジウム報告

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）  
国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討—〈日本意識〉の過去・現在・未来  
アプローチ①「〈日本意識〉の変遷—古代から近世へ」

## 第 1 回シンポジウム

### メディアと日本意識

#### —批判とは何かを、若い世代が考える—

- 報告者：佐藤 東洋（近代日本思想史研究家）  
李 知蓮（法政大学大学院国際日本学インスティテュート博士課程）  
川崎 那恵（大学職員）  
三浦 友幸（シャンティ国際ボランティア会）
- 日 時：2013 年 9 月 21 日（土）14：00～17：00
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナードタワー 25 階 B 会議室
- 司 会：田中 優子（法政大学社会学部教授）  
野中 大樹（週刊金曜日 編集者）

今回のシンポジウムは、第 1 部でパネリストがそれぞれ 15 分から 20 分程度の問題提起を行い、第 2 部では提起された問題を踏まえ、パネリストと会場内の参加者との間で質疑応答が行われた。

第 1 部のパネリストによる問題提起の概要は以下の通りであった。

最初の報告者である川崎那恵氏は、「寝た子を起こして、仲良くごはん。」と題し、被差別部落出身者とそれ以外の人々との関わり方、被差別部落出身者の自らの出自に対する態度のあり方、被差別部落出身であることを公にし、氏名と顔を人々に示すことの持つ意味などを取り上げた。そして、被差別部落の出身であることを公言する人も隠そうとする人も、「次の世代には差別をなくしたい」という点では同じ問題意識を持っており、前者は積極的に周囲の人々と関わることで差別をなくすと考え、後者は時間が経てば周囲も被差別部落の問題に対する関心を持たなくなり、問題そのものが解消されるであろうと考えていることが指摘された。

2 番目の報告者の三浦友幸氏は、東日本大震災で津波の被害にあった気仙沼市の海岸に建設が予定されている高さ 9.8 メートルの防潮堤を巡る行政と住民の取り組みを紹介した。具体的には、行政側から事前に十分な説明がないまま提示された防潮堤の建設案に対し、気仙沼市大谷地区の住民が「計画の一時停止」と「住民の意向を十分に反映した計画の策定」を要望する要請書を気仙沼市長に提出するとともに、有志が大谷地区を含む各地区の連合による「防潮堤を勉強する会」を結成して検討を重ね、2012 年 11 月に宮城県知事に対し要望書が提出されたことが示された。さらに、有志による「大谷まちづくり勉強会」が「砂浜の確保」や「津波防災対策」を中心とする大谷海岸の役割と津波対策についての具体案を検討し、自治会に提示されたことも事例として挙げられた。

3 番目に報告した佐藤東洋氏は政治史、政治思想史を研究する立場から、「自由の持つ意味」、「中央政府と地方政府の相克、対立」、「民主制における圧力団体の存在意義と日本人の非政治性」といった点を、具体例に基づきながら理論的に説明した。さらに、民主制、あるいは民主的な社会は存在ではなく当為として捉えられるべきものであること、また、「差別は固定的

ではなく、ある日突然やってくるもの」という事実に基づき、「差別する側が差別される側になる」ことの自覚を一人ひとりが持つことの重要性を指摘した。

4 番目の報告者である李知蓮氏は、まず感情の面において日本的な特徴であるとされる義理を取り上げ、義理が決して日本に固有の国民道徳ではなく、世界の各地で見出される普遍的な感情であることと、普遍的な感情でありながら閉ざされた体系を作り上げることを指摘した。さらに、義理に対する世代間の差に着目し、人間に普遍的な要素である義理が、世代が新しくなればなるほど人々の関心を集めなくなっているという世界的な傾向は、人間関係の希薄化から影響を受けた結果であるとともに、義理の存在感の低下が人間関係の希薄化に作用している可能性を示唆した。

このような問題に基づいて行われた第 2 部の質疑応答では、「領土問題に対する中央と地方の反応の差」、「愛郷心や郷土愛と愛国心は直接結びつくものか否か」、「国益」と「地域益」はどこまで一致するか、「選挙において、「分かりやすさ」は人々の投票行動にどのような影響を与えるか」、「ヘイトスピーチと所得格差の拡大の間に相関性はあるのか」、「義理の希薄化」と「批判の難しさ」はどのように結びつくのか」といった事項が会場の参加者とパネリストから提起され、議論が行われた。さらに、会場の参加者からは「東日本大震災以来、「ふるさと」に対する肯定的な評価が絶対化しているが、「ふるさととは何か？」という点は少しも検討されていないため、具体的な議論が必要ではないか」、あるいは「批判は攻撃ではなく、相手に働きかける仕組み、相互に建設的な議論を行うための第一歩なのではないか」という意見も提示された。

議論を通して、今回のシンポジウムの特徴でもある「若い世代」にとって、「日本意識」というものがなくとも「郷土愛」や「郷土意識」が成り立っていること、義理という日本の国民道徳と考えられている要素が人類にとって普遍的な価値を有していること、「ヘイトスピーチ」に反対する人々の動きが人種差別の撤廃という普遍的な価値に根差していることなどが指摘され、現在の日本において、一人ひとりの人間が日常生活の中で意識や行動の普遍性を獲得

しつつある可能性が示唆された。さらに、そのような普遍性の下では、「右翼と左翼」、「愛国者と非国民」といった、イデオロギーに基づく従来の二項対立的な図式が意味を持たず、より複雑な関係が人々の中で成立している可能性も指摘された。

今回のシンポジウムは従来の「日本意識」の歴史的な研究とは異なる論点を含んでいる。このような

同時代の、しかも30歳代の報告者の現実に根差した議論は、今後「日本意識」を考察する際に重要な視点である。

【記事執筆：鈴木裕輔

(法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)】

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)

“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”

Research Approach 1 “Changes in ‘Japan-consciousness’: from Ancient to Early Modern Eras”

### 1st Symposium

## Media and Japan-consciousness: What the Young Generation Thinks is the Meaning of Criticism

Panelists: Toyo Sato (Scholar of the history of modern Japanese thought)  
Jieyon Li (Doctoral candidate, International Japanese Studies Institute, Graduate School, Hosei University)  
Tomoe Kawasaki (University staff member)  
Tomoyuki Miura (Shanti International Charity)

Date: Saturday, 21 September 2013, 14:00-17:00

Venue: Hosei University Ichigaya Campus Boissonade Tower 25th Floor Conference Room B

Chair: Yuko Tanaka (Professor, Faculty of Social Sciences, Hosei University)

Coordinator: Daiki Nonaka (Editor, *Shukan kinyobi*)

This symposium was composed of two parts: the four

panellists were allocated 15-20 minutes each to raise issues, and then questions and answers based on those issues took place between the panellists and audience participants.

The debate indicated that as far as the “young generation” – the feature of this symposium – is concerned, “local patriotism” and “local consciousness”, if not “Japan-consciousness”, thrives; also, elements considered to be the national Japanese ethics of duty include values universal to mankind, and people’s movements opposing “hate speech” are rooted in the universal values of abolishing racial discrimination. This suggested the possibility of a continuing acquirement of universality in the consciousness and actions in the lives of every human being in the Japan of today. Furthermore, with such universality, more complex relationships would arise among people that would not fit the long-standing ideological dichotomies of “left-wing versus right-wing” or “patriot versus anti-nationalist”. This symposium included points of debate differing from previous research that embraced the historical nature of “Japan-consciousness”. The discussion of contemporary matters, based in the real world, by panellists aged in their 30s provides important insight for future investigation of “Japan-consciousness”.

Report by: Yusuke Suzumura (Visiting Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

戦略研究基礎形成支援項目 研究方法① “‘対日認識’の变迁——从古代到近代”

第1次研讨会

## 媒体与对日认识

### —年轻一代所思考的批判是什么—

报告者：佐藤 东洋（近代日本思想史研究家）  
李 知莲（法政大学国际日本学学院博士课程）  
川崎 那惠（大学职员）  
三浦 友幸（和平国际志愿者协会）

日期：2013年9月21日（星期六）14:30-17:00

会场：法政大学市谷校区 布瓦索纳德大厦25层 B会议室

主持：田中 优子（法政大学社会学部教授）  
野中 大树（杂志《週刊星期五》编辑）

此次研讨会的第一部分，由4名报告者分别用15至20分钟指出了问题的所在；第二部分则在这些问题的基础之

上，由报告者和与会者之间进行了讨论和答疑。

通过讨论，可以得出以下几个结论：此次研讨会的主要对象是“年轻一代”，对于他们来说就算没有所谓的“对日认识”，“乡土之爱”、“乡土意识”等也是存在的；被认为是日本国民道德的“义理”，对于人类来说具有普遍性价值；反对“仇恨言论”的举动，是与废除种族差别这一普遍性价值密切相关的。此外，讨论还揭示出了，在当今日本社会每个人都有在日常生活中逐步掌握意识与行动的普遍性的可能。在这样的普遍性之下，诸如“右翼与左翼”、“爱国者与非国民”之类，基于意识形态的二项对立性概念是没有意义的，人与人之间会形成更为复杂的关系。此次研讨会包含了不同以往的“对日意识”研究论点，像这样针对同时代的课题、由30多岁的报告者所进行的基于现实的讨论，应该成为此后考察“对日认识”的重要视点。

【执笔者：铃木 裕辅

(法政大学国际日本学研究所客座学術研究員)】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업(2010년~2014년)  
 국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식> 재검토-〈일본의식〉의 과거·현재·미래  
 연구① <일본의식〉의 변천-고대에서 근세로  
 제1회 심포지엄

## 미디어와 일본의식

### — 비판이란 무엇인가, 젊은 세대가 말하다

보고자: 사토 도요(佐藤東洋, 근대일본사상사 연구)  
 이지연(李知蓮, 호세이대학교 국제일본학인스  
 티튜드 박사과정)  
 가와사키 도모에(川崎那恵, 대학교 직원)  
 미우라 도모유키(三浦友幸, 산티 국제볼런티어  
 회)

일 시: 2013년 9월 21일(토) 14:00~17:00

장 소: 호세이대학교 이치가야 캠퍼스 보아소나드 타  
 워 25층 B회의실

사 회: 다나카 유코(田中優子, 호세이대학교 사회학부  
 교수)  
 노나카 다이키(野中大樹, 주간금요일 편집자)

이번 심포지엄은 제1부에서 4명의 토론자가 각각  
 15~20분 정도 문제를 제기하고, 제2부에서는 제기된

문제를 바탕으로 토론자와 참가자 간의 질의응답이 이  
 루어졌다.

논의를 통해 이번 심포지엄의 특징이기도 한 ‘젊은 세  
 대’는 ‘일본의식’이라는 것이 없어도 ‘향토애’나 ‘향토의식’  
 을 가지고 있다는 것, 일본의 국민 도덕으로 간주되던  
 의리’ 라는 요소가 인류 보편적인 가치를 가지고 있다  
 는 것, ‘헤이트스피치’(증오연설)에 반대하는 사람들의  
 움직임이 인종차별 철폐라는 보편적 가치에 기반을 두  
 고 있다는 것 등을 지적하여, 현재 일본에서 개개인이  
 일상생활 속에서의 의식과 행동이 보편성을 획득해가고  
 있다는 가능성이 시사되었다. 또한 그러한 보편성 아래  
 에서는 ‘좌익과 우익’, ‘애국자와 비국민’이라는 이데올  
 로기를 기반으로 한 기존의 이분법적인 도식은 의미 없  
 으며, 사람들 사이에서는 더 복잡한 관계가 성립되고 있  
 을 가능성도 지적되었다.

이번 심포지엄은 지금까지의 ‘일본의식’에 관한 역사  
 적 연구와는 다른 논점을 포함하여 이루어졌다. 이렇게  
 현시대의 과제에 대해 30대 젊은 보고자들의 현실에 근  
 거한 논의는 앞으로 ‘일본의식’을 고찰하는데 중요한 시  
 점이라고 본다.

【기사집필: 스즈무라 유스케

(鈴木裕輔, 호세이대학교 국제일본학연구소 객원학술연구원)】



(左から) 李知蓮氏、佐藤東洋氏、川崎那恵氏、  
 三浦友幸氏、野中大樹氏



司会: 田中優子氏 (法政大学社会学部教授)



會場の様子

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）  
 国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討—〈日本意識〉の過去・現在・未来  
 アプローチ①「〈日本意識〉の変遷—古代から近世へ」

## 第 1 回研究会

### 「夫婦有別」と「夫婦なかよく」—清朝中国と徳川日本

- 報告者：渡辺 浩（法政大学法学部教授）
- 日 時：2013 年 7 月 20 日（土）14：30～16：30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー 25 階 B 会議室
- 司 会：田中 優子（法政大学社会学部教授）

今回の研究会では、法政大学法学部教授の渡辺浩氏を招き、「夫婦有別」と「夫婦なかよく」——清朝中国と徳川日本」と題して行われた。

報告の概要は下記の通りであった。

教育勅語（1890 年）の説く「臣民」の「拳々服膺」すべき「皇祖皇宗ノ遺訓」は、往々儒教的であると考えられている。しかし、一切の道徳的行為を「皇運」を「扶翼」するための手段とみなすという点で、既に儒教的ではない。また、教育勅語にいう「夫婦相和シ」は、「夫婦有別」を説く儒教道徳に背くものである。一方、徳川日本では「夫婦」といえば仲睦まじくあるべきものと説く習慣があった。それ故、教育勅語の「夫婦相和シ」との教えは、以前から日本で有力であった教説を踏襲していると考えられる。実際、夫婦円満を倫理的、道徳的責務として説く徳川日本にあって、儒者の中には「夫婦有別」の伝統的な解釈が適切でなく、「有別」とは夫婦の間の厳格な区別ではなく、「この男とこの女の組み合わせ、あの男とあの女の組み合わせ」という組み合わせの区別を示すものだと理解する者もいた。

「夫婦有別」「男女有別」の教えが説得力を持ちにくかった一因は、徳川日本の社会実態として「別」が弱かったことであろう。例えば、外出し、他人と交際し、比較的自由的な活動が出来た徳川日本の女性と、纏足によって歩行能力が制約され、自ずから家の中に閉じこもりがちになっていた中国の女性との間の違いは大きい。実際、徳川日本では男女の混浴さえ広く行われ、女性は労働の面でも男性とともに農業や商業などに従事することが期待された。

では、徳川日本において「男女の別」が緩やかであっただけでなく、何故積極的に夫婦円満が道徳的な責務として説かれたのか。その一因として、離婚が難しかった同時代の欧米や中国、あるいは現在の日本に比べ、徳川日本では離婚が比較的容易で、しかも頻繁であったという事実が挙げられる。また、当時の欧米や、中国と異なり、徳川日本では花嫁に性的経験のないことをきわめて重要と考える風習がなかったことも、離婚と再婚の頻度を高くする要因であったといえるだろう。その意味で、夫婦関係は、仲良く親しみあう「和熟」の状態にある限りにおいて続くという性質を持っていたのである。そのため、徳川日本の人々は、「家」や「家業」のため、そして当人自身のため、夫婦になったからには添い遂げることが望ましく、そのために互いに努力をすべきであるという願いを込めて、「夫婦なかよく」と説いたのである。

周知のように、徳川時代の「家」は中国の「家」と異なり、特定の「家業」を営む経営体であり、將軍から百姓に至るまで、それぞれの「家」は何らかの「家業」を有していた。そして、それぞれの「家」が自らの「家業」に励むことによって世の中全体が成り立っていると考えられていた。そのため、個々の「家」は国を成り立たせるために必要な単位であり、「家業」を守り立てるために夫婦が共同で「家業」に従事し、「夫婦なかよく」あることが求められたのである。また、「不聴婦言」こそ「治家長久之道」とする中国とは異なり、妻が夫に対してだけでなく、夫も妻を相談相手とすることは徳川日本の夫婦にとって当然と考えられていた。換言するなら近代欧米の home は work と切り離された純粋な private な領域であるが故に、love が求められる。これに対し、徳川日本の「家」は home と work が一体化しているが故に、「夫婦相和シ」ていることが「家のため」、「家業のため」に求められたのである。

ちなみに、本居宣長は「中国には男性が女性を想う詩がないが、これは上辺をつくろう中国の性格の現れだ」と中国を批判している。さらに一部の国学者は、日中の相違の一つとして、「夫婦相和」と「夫婦有別」に注目し、和合を日本の特色として強調した。

豊富で広範な同時代の資料から実証的に検討し、中国とも欧米とも異なる日本の夫婦に対する考え方、家庭の捉え方を示した今回の報告は、社会を形成する根本的な単位としての夫婦の特徴を描き出すものであった。このような夫婦のあり方への考え方を理解することは、当時の日本の社会の状況をよりよく理解するだけでなく、より人々の生活に密着した観点か



渡辺 浩氏（法政大学法学部教授）

ら日本意識を検討することを可能にするという意味でも、意義深いものであると考えられた。

【記事執筆：鈴木 裕輔

(法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)】

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)

“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”

Research Approach 1 “Changes in ‘Japan-consciousness’: from Ancient to Early Modern Eras”

1st Research Meeting

## “May Distinction Exist between Husband and Wife” and “As Husbands and Wives Be Harmonious”: Qing Dynasty China and Tokugawa Japan

Speaker: Hiroshi Watanabe (Professor, Faculty of Law, Hosei University)

Date: Saturday, 20 July 2013, 14:30-16:30

Venue: Hosei University Ichigaya Campus Boissonnade Tower 25th Floor Conference Room B

Chair: Yuko Tanaka (Professor, Faculty of Social Sciences, Hosei University)

This research meeting invited Professor Hiroshi Watanabe of the Faculty of Law, Hosei University, to talk on the theme of “‘May Distinction Exist between Husband and Wife’ and ‘As Husbands and Wives be Harmonious’”.

Qing Dynasty China and Tokugawa Japan’. The Confucian ethic “‘May distinction exist between husband and wife’” was contradicted by the idea of “‘husband-and-wife harmony’” in the Imperial Rescript on Education. It meant that in Edo period Japan man/woman difference was vague. Husband-and-wife happiness was interpreted in positive terms as a moral duty. At the same time the gap between Japan and China and the West in the perception of “‘the family’” has created discrepancies in the understanding of family life. This presentation made a practical examination of the abundant and wide-ranging material from that era to indicate the way of thinking towards husband and wife as well as the way of understanding family life in Japan: these differ from the ways in both China and the West. It described the characteristics of the husband-and-wife unit that serves as a basis structuring society. Knowing how to perceive this husband-and-wife relationship is significant not merely in learning more about Japanese society of those times, but it also has great relevance for facilitating investigation of Japan-consciousness from an even closer standpoint in people’s lives.

Report by: Yusuke Suzumura (Visiting Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

战略研究基础形成支援项目 研究方法①“‘对日认识’的变迁——从古代到近代”

第1次研究会

## “夫妇有别”与“夫妇和睦”

—清朝中国与德川日本—

报告者：渡边 浩（法政大学法学部教授）

日期：2013年7月20日（星期六）14:30-16:30

会场：法政大学市谷校区 布瓦索纳德大厦25层 B会议室

主持：田中 优子（法政大学社会学部教授）

此次研究会上，法政大学法学部教授渡边浩作了题为“‘夫妇有别’与‘夫妇和睦’—清朝中国与德川日本”

的报告。与儒家道德所倡导的“夫妇有别”不同，在日本的教育诏书中出现了“夫妇和睦”的提法，这主要是由于从江户时代起“男女有别”开始变得宽松，而夫妇圆满则被作为道德性义务开始被提倡。对于“家”的认识和理解，日本和中国及欧美之间也有所不同。此次报告通过大量引用和考证同时代的资料，展示出了日本不同于中国及欧美的夫妇观和家庭观，并描绘出了作为社会基本单位的夫妇的特点。这种对夫妇的应有姿态的思考，不仅有助于更好地理解当今日本的社会状况，更孕育着从与人们的生活密切相关的角度来讨论对日认识的可能性。

【执笔者：铃木 裕辅

(法政大学国际日本学研究所客座学术研究员)】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업(2010년~2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토-<일본의식>의 과거·현재·미래

연구① <일본의식>의 변천-고대에서 근세로

제1회 연구회

## 「부부유별」과「부부원만」

—청 왕조와 도쿠가와 일본—

보고자: 와타나베 히로시(渡辺浩, 호세이대학교 법학부 교수)

일시: 2013년 7월 20일(토) 14:30~16:30

장소: 호세이대학교 이치가야 캠퍼스 보아소나드 타워 25층 B회의실

사회: 다나카 유코(田中優子, 호세이대학교 사회학부 교수)

이번 연구회는 호세이대학교 법학부 와타나베 히로시 교수를 맞이하여 「부부유별」과「부부원만」-청 왕조와 도쿠가와(德川) 일본-이라는 주제로 열렸다.

그 결과, 교육칙어(教育勅語)에 쓰여 있는 ‘부부가 서로 화목하고’(夫婦相和シ)라는 문구는 ‘부부유별’을 말하는 유교의 도덕과는 상반되며, 남녀유별이 엄격하지 않았던 일본의 에도(江戸)시대에 부부원만을 도덕적인 책임으로 해석한 것에서 유래한다고 지적하였다. 또한 ‘이(家)에 대한 일본과 중국, 서양과의 의식 차이도 가정에 대한 이해의 차이를 낳았다. 풍부하고 광범위한 동시대의 문서를 실증적으로 검토하고 중국과도 서양과도 다른 일본의 부부에 대한 사고방식과 가정을 어떻게 인식하고 있는지를 보여준 이번 보고는 사회를 형성하는 기본적인 단위로서 부부의 특징을 그려냈다.

이러한 부부 본연의 모습에 대한 사고방식을 아는 것은 당시의 일본사회의 상황을 더 잘 이해할 수 있을 뿐만 아니라 사람들의 일상생활에 더욱 밀착된 관점에서 일본의식의 검토를 가능하게 했다는 점에서도 뜻깊은 보고였다.

【기사집필: 스즈무라 유스케

(鈴木裕輔, 호세이대학교 국제일본학연구소 객원학술연구원)】

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）  
 国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討—〈日本意識〉の過去・現在・未来  
 アプローチ①「〈日本意識〉の変遷—古代から近世へ」

## 第 1 回みちのくワークショップ近代篇

- 報告者：山内 明美（大正大学人間学部特命准教授）
- 日 時：2013 年 10 月 25 日（金） 18：30～20：30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 九段校舎 3 階 第一会議室
- 司 会：田中 優子（法政大学社会学部教授）

2012 年度に「近世篇」と「古代・中世篇」が行われた「みちのくワークショップ」は、2013 年度は「近代篇」を 2 回に分けて行う予定である。第 1 回目となる今回は、大正大学人間学部特命准教授の山内明美氏を迎え、「稲作ナショナリズム—日本近代の自己意識」と題して開かれた。

山内氏は歴史社会学、社会思想史を専門とし、「ナショナリズム」、「マイノリティ」、「東北」、「地方」、「民衆」、「農漁村」などを手掛かりとして研究を行い、主な著書に『こども東北学』（単著、2012 年）、『「辺境」からはじまる—東京／東北論—』（共著、2012 年）、『「東北」再生』（共著、2011 年）などがある。今回は、山内氏の主たる研究対象である稲作とナショナリズムとの関わりを通して、日本の近代における自己意識と東北の位置付けの変化とが検討された。

報告の概要は以下の通りであった。

米飯が日本人の食生活に占める割合は低下しているものの、日本人の大多数は今もコメを「日本人の主食」と考えている。しかし、コメの生産と消費の関係を見ると、何度かの変遷のあったことが分かる。具体的には、都市化の未発達、コメよりも雑穀（あるいは野菜やコメの混食など）が主食であったこと、さらに地域ごとの食文化が残っていたことなどから、1910 年代までの日本はコメ余りの状態であった。しかし、都市化の進展などにより、その後の日本においてコメは長年にわたって需要が生産を上回ることになり、日本は 1960 年代半ばまで世界最大のコメの輸入国であった（Ex. 大豆生田 1995）。そのような近代の日本の状況の中で東北の位置付けを考えると、「東北の多様性」が浮かび上がる。すなわち、(1)「資本主義」と「(村落) 共同体社会」の間、(2)「植民地」と「宗主国」の対立、(3)「植民地」と「(村落) 共同体社会」の間にある「アイヌ／エゾ」と「資本主義」と「宗主国」の間にある「欧米」との間という、3 つの対立の間に「東北」が置かれる。この「東北の多様性」を把握しないと、われわれは東北のあり方を見失ってしまうのである。

さて、穀物を祭祀の対象とするか否かが「まつろう」者と「まつろわぬ」者とを分けるという民俗学上の理解が示すように、古代の日本において天皇が担った最も重要な役割は「食国の政」と呼ばれる服属儀礼であった。「食国の政」は政治的側面から見ると、天皇が自らの配下に属さない者たちを隷従させ、「民」に編入し、田を作らせ、その田から得られた穀物を税として納めさせることである。「食国の政」は古代の祭祀的、政治的儀礼であるものの、明治時代になっ

て形を変えて再び蘇ることになる。すなわち、明治時代初期は北国では稲作を普及させないことが国策であったものの後に稲作の促進へと政策が転換され、従来は肉食や魚食を主としてきたアイヌもコメの配給制度によって、米食が加率的に日常化する。そうした近代国家制度の下で、「近代における食国の政」が拡大していくことにもなった。

そのようなコメは、単なる農作物の一つではなく、その内部においても序列を持つ、ある意味で独特なものであった。すなわち、戦前の日本では国産米を頂点とし、外国産米であってもサイゴン米、ラングーン米が上位に、南京米が下位に置かれるという階層が存在したのである。また、1918 年の米騒動が社会不安をもたらしたことも、日本においてコメが占める独特の地位を示している。さらに、米騒動の後に原敬が東北出身者として初めて首相に就任し、1919 年に産米増殖計画基本調査が行われ、15 年でコメの生産量を倍増させる計画が立てられた。原就任後の政策は、社会不安の広がる世情において、内地では東北振興、外地では食糧増産を進めた。東北地方との技術の共有が進められるとともに、台湾や朝鮮半島で在来品種の代わりに日本米を栽培し、品種改良が行われたものである。

これに対し、戦後の東北地方は農業構造改善事業が行われ、結果的に現在に続く田園風景が確立されるとともに、品種改良の成果によって 19 世紀末から 20 世紀初頭には低かった東北 6 県の収穫量が向上し、1990 年代には 6 県すべてが全国の上位 10 傑に入り「米どころ」という現在の東北地方の姿が定着するに至ったのであった。

本報告では、コメに関する議論は多いものの、「コメのプランテーション」や「コメのモノカルチャー」といった視点は長らく等閑視されており、これらの視点が日本人にとって自明すぎるために議論されなかったのか、あるいは触れ難い事項であったからかということを含め、コメが日本人にとって単なる穀物の一種ではなく、宗教的、社会的、文化的に重要な価値を持つことが定量的、定性的に検討された。精神的、文化的な要素だけでなく、コメのような物質的な対象からも日本意識を探ることが可能であることが示された今回の報告は、「日本意識」の研究を行う上で、示唆に富む内容であったといえるだろう。

【記事執筆：山内 明美（大正大学人間学部特命准教授）、  
 鈴木 裕輔  
 （法政大学国際日本学研究所客員学術研究員）】

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)  
“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”

Research Approach 1 “Changes in ‘Japan-consciousness’: from Ancient to Early Modern Eras”

## 1st Michinoku Workshop (Modern era)

Speaker: Akemi Yamauchi (Specially Appointed Associate Professor, Faculty of Human Studies, Taisho University)

Date: Friday, 25 October 2013, 18:30-20:30

Venue: Hosei University Ichigaya Campus Kudan Schools 3rd Floor Conference Room I

Chair: Tanaka Yuko (Professor, Faculty of Social Sciences, Hosei University)

This workshop used the connection between the rice crop and nationalism - the research focus of Professor Akemi Yamauchi - to investigate modern Japanese consciousness of self, alongside changes in definition of the Tohoku region. We considered how rice has played a role in forming a consciousness of self among the Japanese people

and country, given that rice, the so-called “staple food of the Japanese”, was imported until the mid 1960s, and a rice shortage was behind the social unrest that occurred. We learned that “Tohoku”, although within Japan, has an unusual colonial nature. It was furthermore mentioned that, despite much debate surrounding rice, there are few opportunities to talk of “rice plantation” or “rice monoculture”: is it that this view is too self-evident for Japanese people to discuss, or is it a matter that should not be touched upon? This relates to the fact that for Japan rice is not merely a type of grain, but is also of religious, social and cultural importance. This presentation showed us the possibility of searching for Japan-consciousness in a material focus such as rice, rather than in just spiritual and cultural elements, and provided us with many clues for doing this.

Report by: Akemi Yamauchi (Specially Appointed Associate Professor, Faculty of Human Studies, Taisho University)

Yusuke Suzumura (Visiting Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

战略研究基础形成支援项目 研究方法① “‘对日认识’的变迁——从古代到近代”

## 第1次陆奥研究会近代篇

报告者: 山内 明美 (大正大学人类学部特命准教授)

日期: 2013年10月25日 (星期五) 18:30-20:30

会场: 法政大学市谷校区 九段校舍3层 第一会议室

主持: 田中 优子 (法政大学社会学部教授)

山内明美准教授的研究对象为水稻种植与国家主义的关系, 报告以此为主题对日本近代的自我认识及对东北地区定位的变化进行了讨论。具体来说, 作为“日本人主食”的大米到1960年中期为止一直都在被进口, 在大米不足的背景也曾出现过社会不安的情况, 报告以此为例考察了大米在日本人的自我认识及国家认识的形成中发挥了怎样

的作用。其结论是, “东北地区”在作为日本的一部分的同时, 也处在具有殖民地性格的特殊立场上。虽然关于大米的讨论有很多, 但是从“大米的种植园”、“大米的单一种植”等角度的分析却很少, 是由于这样的观点对于日本人来说过于理所当然, 又或是由于此类事项不允许被讨论我们不得而知, 但可以肯定的是, 大米对于日本人来说不仅仅是一种粮食, 更有着宗教、社会以及文化方面的价值。通过此次报告可以看到, 关于对日认识的研究不仅局限于精神性、文化性要素, 像大米一样的物质性对象也同样存在着讨论的可能性。

【执笔者: 山内 明美 (大正大学人类学部特命准教授)

铃村 裕辅

(法政大学国际日本学研究所客座学术研究员)】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업(2010년~2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식> 재검토-〈일본의식〉의 과거·현재·미래

연구① <일본의식〉의 변천-고대에서 근대로

## 제1회 미치노쿠 워크숍 근대편

보고자: 야마우치 아케미(山内明美, 다이쇼(大正)대학교 인문학부 특명부교수)

일 시: 2013년 10월 25일 (금) 18:30~20:30

장 소: 호세이대학교 이치가야캠퍼스 구단교사3층 제1회의실

사 회: 다나카 유코(田中優子, 호세이대학교 사회학부 교수)

이번 워크숍에서는 야마우치 아케미 교수의 주요 연구대상인 벼농사와 내셔널리즘과의 관계를 통해 근대 일본의 자의식과 도호쿠(東北) 지역의 자리매김이 어떻게 변화하였는지 등이 검토되었다. 구체적으로는 ‘일본인의 주식’으로 여겨져 온 쌀이 1960년대 중반부터 수입되었고 쌀 부족을 배경으로 사회불안이 생긴 것들을 예로 들어 쌀이 일본인의 자의식과 자국인식 형성에 어떤 역할을 해왔는지를 고찰하였다.

그 결과, ‘도호쿠’ 지역이 일본에 속해 있으면서도 식민지적 성격을 띠고 있는 특수한 입장에 있다는 점이 지적되었으며, 쌀에 관한 논의는 많이 이루어졌지만 ‘쌀의 플랫폼이션’과 ‘쌀의 모노컬처’라는 시점에서 논의한 적이 드물었다는 지적도 있었다. 이러한 시점은 일본인에게 너무 당연하기 때문에 논의되지 않았던 것인지 아

니면 다루어서는 안 되는 사항이었는지를 포함하여, 쌀이 일본인에게 단지 곡물 중의 한 종류로서 만이 아닌 종교적, 사회적, 문화적으로 중요한 가치가 있다는 점도 언급되었다. 정신적, 문화적인 요소만이 아니라 쌀과 같이 특질적인 대상에서도 일본의식을 탐구할 수 있다는 가능성을 제시한 이번 보고는 시사하는 바가 큰 발표였다.

【기사집필:

야마우치 아케미(다이쇼대학교 인문학부 특명부교수),

스즈무라 유스케(鈴村裕輔, 호세이대학교 국제일본학연구소 객원학술연구원)】



山内 明美 氏 (大正大学人間学部特命准教授)

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）  
 国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討—〈日本意識〉の過去・現在・未来  
 アプローチ③「〈日本意識〉の現在—東アジアから」

## 第 1 回東アジア文化研究会 禹王を巡る日中の文化交流

- 報告者：大脇 良夫（日本と中国の禹王遺跡行脚研究家、治水神・禹王研究会会長）
- 日 時：2013 年 4 月 10 日（水）18：30～20：30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所専任所員、教授）

### 1. 研究の端緒

富士山や丹沢山を源流に持ち静岡県東部から神奈川県西部に流れる全長 46km の酒匂川は、足柄平野に豊かで清冽な水と肥沃な大地を与える一方、急流河川で有名であり暴れ川にも豹変し 1650 年からの 450 年間の大水害は、45 回とほぼ 10 年に一度に及んでいる。富士山宝永噴火（1707 年）の噴火砂の約 7 割は、酒匂川に流れ込んだとされており、河床を上げ続け酒匂川流域を洪水の増埒に陥れたことから「富士山噴火災害とその教訓」を研究する者にとって酒匂川の名を知らない者はいない。地元の立場から私も加わっていたのだがその過程で、酒匂川の治水神が中国初代の帝王・夏の禹王の別名「文命」であることを「文命社の神社明細帳」で目にして以来、その不思議に深く打たれた私は、日本全国にも同じような例があるはずと禹王遺跡行脚を開始した。2006 年 11 月のことであった。

### 2. 2013 年 3 月までの研究成果概要

2006 年 11 月から 2013 年 3 月までの研究成果の概要は以下の通りである。

- ① 禹王遺跡の時代別・種別一覧（下図）：江戸、明治期中心だが昭和、平成にも建立されている
- ② 禹王遺跡建立地に共通する特徴：下記 3 条件が合い備わって禹王遺跡は建立、存続する
  - A. 水害の多発地帯（防災祈願や収穫豊穰祈願の必要な地）《建立必要条件》
  - B. 禹王（文命）を熟知する儒学者や土木家の関与《建立十分条件》
  - C. 建立された禹王遺跡の価値を認め継承して行く文化の存続《存続維持条件》
- ③ 63 箇所中の 17 箇所は日清戦争後、友好条約締結までの「日中間に諍いのあった不幸な時期」（1894～1972 年の 78 年間）の建立である。この間にも中国

日本禹王遺跡の時代別・種別一覧		2013年4月1日現在					計	
種別	江戸期以前 (主た江時代不詳)	江戸時代	明治時代	大正時代	昭和時代	平成時代		
区	I 群 揚子江に由来するもの禹が龍神（表礼）に	1228 京都鴨川・真禹王廟 時代不詳 橋本真岡禹廟	1832 東京・国立博物館；大禹像西 1830 名古屋；徳川美術館禹金像 1837 高松；大禹像 1704 静岡三島；禹王廟 1708 埼玉久喜；文命聖廟 1718 大阪島本； 皇大禹聖王碑 1726 神奈川南足柄； 文命東堤碑と文命宮 1726 神奈川山北； 文命西堤碑と文命宮 1740 大分白杵；禹禮合祀の壇 1753 大阪柏原；小禹廟 1838 岐阜；禹王木像 禹王冠掛軸 大禹王尊 禹王さん灯籠 1849 埼玉北葛藤杉戸 大禹像碑 1855 京都御所； 大禹成酒防儀図	1874 群馬・片品； 大禹皇帝碑 1900 愛知愛西市； 木曾川文碑；禹功徳利 1903 岐阜春老町；禹功門	1919 群馬沼田；禹王碑	1972 広島佐東；大禹誕 1988 北海道千歳市； 禹王石碑		24
	II 群 治水神（禹）に由来するもの禹王に由来するもの治水神・禹王	1373 山口；山口十境詩「鵝石生雲」	1874 大阪十三；島達悦皇碑 1890 沖縄南風原；宇平橋碑 1721 鎌倉建長寺； 河村君意碁盤 1797 山梨鰺沢；富士水 1819 北名古屋； 水笠十哲君治水碑 1819 佐賀久保田； 明春寺鐘銘 1823 兵庫丹波； 金坂経道供養塔 1838 大分白杵；不次塚 1859 鹿児島種子島； 水天之神	1870 茨城取手藩代 神浦堤成橋碑 1886 大阪高槻市唐崎 1886 大阪都島区移宮神社 淀川洪水記念碑 1890 大阪高槻市唐崎 明治成辰唐崎修堤碑 1891 岐阜大垣；和村光重之 碑 1891 東京谷中；人力車発明 記念碑 1895 千葉園田；船橋陸奥 先生水十功績之碑 1896 鳥取伯耆町；藤田・ 大若二君功勞紀功碑 1897 宮城石巻；川村孫兵衛 紀功碑 1908 岡山北區；川口修堤之 碑 1909 大阪都島区毛馬； 淀川改修紀功碑	1912 福井足羽上町； 九頭龍川修治碑 1923 大阪西成区； 治水翁碑 大橋原太郎紀功碑 1923 神奈川横須賀市； 西田明則君之碑 1925 京都西京区； 千光寺・模稜高泉詩碑	1920 新潟燕市； 句碑上人句碑 1936 新潟南魚沼市； 砂防記念碑 1934 東京文京区；東京大学 古市公威像 1954 岐阜養老町； 大橋川水門改築記念碑 1990 東京墨田区； 幸田露伴文字碑	1989 鹿児島種子島 区高野宮八幡宮； 2012 兵庫姫路魚吹八幡宮； 屋木の禹木彫像	33
	III 群 地名・寺名に禹が使用される	720 新潟佐渡羽茂町； 禹武邑 1455 愛媛西予市； 瀧門山龍潭寺 時代不詳 山梨・富士川市；禹之瀨	福島伊達市；禹父山 福岡博多区；禹弘寺 (現在；観音寺) 1752 長野高森町；禹余堤・ 禹余石					6
合計	6	28	14	6	7	2	63	

初代の帝王・禹王が治水神として日本の各地に建立され崇められてきたことの意義を味わい考察したい。なお、各地の詳細は2013年7月発刊の『治水神禹王をたずねる旅』（人文書院、大脇良夫・植村善博共著）を参照されたい。

### 3. おわりに

禹王遺跡発見の足跡を数で示すと、2006年3ヶ所、以下07年7、08年8、09年14、10年18、11年22、12年50、13年63ヶ所と、11年以降、急増している。禹王遺跡行脚の開始から丸4年を経た09年末、当時の禹王遺跡研究の仲間（群馬県・片品村、神奈川県・開成町、山梨県・富士川町、京都市・鴨川、大阪市・淀川、香川県・高松市、大分県・臼杵市）に「禹王文化まつり」開催を呼びかけた。その結果、2010年神奈川県（開成町）と12年群馬県（片品村）で開催したが、禹王遺跡所在地の一般市民を中心に4日間合計

で3千人余が集まった。このような禹王遺跡への関心の高まりにより、2011年以降に禹王遺跡の発見数が増加したのではないかと推察する。今後も、禹王遺跡の存続維持条件である「建立された禹王遺跡の価値を認め継承して行く文化の存続」を、各地とともに着実に進めていきたいと思っている。

また、2011年から中国の禹王遺跡調査も開始した。中国にしか見られない素晴らしい禹王遺跡の数々と、中国の方々に伝えたい日本独特の遺跡と文化という、日中双方の良き歴史文化を紹介し合い、互いに認め尊敬し合える会合を近い日に持つことが出来たらと願っている。2014年10月18日～19日広島・平和公園で開催の第4回「禹王文化まつり・広島」をそのターゲットとして秘かに願っている。

【記事執筆：大脇 良夫

（日本と中国の禹王遺跡行脚研究者、治水神・禹王研究会会長）】



大脇 良夫 氏



講演の様子



会場の様子

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)  
“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”  
Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in East Asia”

### 1st East Asian Culture Research Meeting Cultural Exchange between Japan and China relating to Yu the Great

Speaker: Yoshio Owaki (Researcher of Stone Monument of Yu the Great / President, Research Association for Yu the Great)  
Date: Wednesday, 10 April 2013, 18:30-20:30  
Venue: Hosei University Ichigaya Campus, '58 Building 2F Research Center for International Japanese Studies Seminar Room  
Chair: Min Wang (Professor and Full-time Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

In November 2006 I discovered from old shrine records that the god of flood prevention of the Sakawagawa River in the western part of Kanagawa Prefecture was the first Chinese Emperor, King Yu of Xia (Yu the Great).

I began a pilgrimage of sites relating to Yu the Great in the belief that there must be similar examples throughout Japan. My research results up until March 2013 have revealed the following: 1) Although monuments to Yu the Great mainly date back to the Edo and Meiji periods, some exist that have been constructed in Showa and Heisei. 2) Common to all sites of Yu the Great are three conditions under which the monuments were first erected and then maintained; they are: their location in frequently flooded areas, the involvement of Confucian scholars or civil engineers who know about Yu the Great (name: Bunmei), and the continuation of a culture which passes down an understanding of the value of monuments erected to Yu the Great. 3) Of the 63 locations confirmed to date, 17 were constructed between 1894 and 1972, a dark era of conflict between Japan and China. Research of Yu the Great monument sites has only just begun, and cooperative links with people countrywide is essential. Although the existence of sites in China is to be expected, they have also been confirmed in Korea and Taiwan, suggesting the importance of building a system for cooperative research over the whole of the Kanji cultural sphere.

Report by: Yoshio Owaki (Researcher of Stone Monument of Yu the Great / President, Research Association for Yu the Great)

战略研究基础形成支援项目 研究方法③“‘对日认识’的现状——以东亚地区为中心”

第1次东亚文化研究会

### 围绕禹王的中日文化交流

报告者: 大脇 良夫 (中国与日本禹王遗迹走访研究家、治水神·禹王研究会会长)

日期: 2013年4月10日(星期三) 18:30-20:30

会场: 法政大学市谷校区 58年馆2层 国际日本学研究所讲习室

主持: 王 敏 (法政大学国际日本学研究所专任所员、教授)

2006年11月, 当笔者得知位于神奈川西部的酒匂川的治水神是中国最早的帝王·夏禹王时, 被这一不可思议的现象深深打动了。笔者认为在日本其它地方应该有与之相

同的存在并开始了对禹王遗迹的走访探究。到2013年为止, 其研究成果主要有以下几个方面: (1) 禹王遗迹虽然主要建造于江户和明治时期, 但在昭和、平成时期亦有修建。(2) 水害多发地、熟知禹王(又称文命)的儒学家和土木建筑家的参与、认同并继承禹王遗迹的价值, 是禹王遗迹得以建造和保存的3个必备条件。(3) 在已被确认的63处遗迹中, 有17处是在1894年到1972年这一段“中日相争的不幸的时期”内所建造的。由于禹王遗迹的研究才刚刚开始, 日本各地之间的相互协作是不可或缺的。此外, 在中国大陆、韩国、台湾等各地区, 禹王遗迹的存在已经得到证明, 因而构建整个汉字文化圈的研究合作机制也就显得尤为重要。

【执笔者: 大脇 良夫

(中国与日本禹王遗迹走访研究家、治水神·禹王研究会会长)】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업(2010년~2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토-<일본의식>의 과거·현재·미래

연구③ <일본의식>의 현재-동아시아를 기점으로

제1회 동아시아문화연구회

### 중국 우왕을 둘러싼 일·중 문화 교류

보고자: 오와키 요시오(大脇良夫, 일본과 중국의 우왕 유적 연구가, 치수신·우왕연구회 회장)

일시: 2013년 4월 10일(수) 18:30~20:30

장소: 호세이대학교 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실

사회: 왕 민(王敏, 호세이대학교 국제일본학연구소 전임연구소원, 교수)

2006년 11월 오래된 신사의 장부(神社明細帳)에서, 가나가와(神奈川)현 서부의 사카와(酒匂)강의 치수신(治水神)이 중국의 초대제왕 하우제(夏禹帝, 우왕)라는 사실을 발견한 이래, 그 신비함에 깊은 감동을 받은 나는 일본 전역에도 같은 예가 있을 거라는 생각에 우왕

의 유적을 찾아다니기 시작했다.

2013년 3월까지의 연구성과로서 (1) 우왕 유적은 에도(江戸), 메이지(明治)기를 중심으로 하지만 쇼와(昭和, 1926~1986), 헤이세이(平成, 1989~현재)에도 건립되었다는 점, (2) 유적 건립지의 공통된 특징으로는 수해 다발지역, 우왕(우왕의 이름인 문명(文命))을 잘 아는 유학자와 토목가의 관여, 건립된 우왕 유적의 가치를 인정하고 계승해 가는 문화의 존속 등 3가지 조건을 만족해야 비로소 유적이 건립, 존속한다는 점, (3) 현재 확인된 63곳 중 17곳은 1894~1972년 ‘일본과 중국 간의 다툼이 있었던 불행한 시기’에 건립되었다는 점 등이 밝혀졌다.

우왕 유적연구는 아직 시작 단계로 전국 각지의 관련 자원들과의 연대가 필수불가결하다. 또한 중국 각지는 물론, 한국과 대만에도 우왕 유적의 존재가 밝혀지고 있어 한자 문화권 전체적으로 연구 협력체제를 구축하는 것이 중요할 것이다.

【기사집필: 오와키 요시오

(일본과 중국의 우왕 유적 연구가, 치수신·우왕연구회 회장)】

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）  
国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討—〈日本意識〉の過去・現在・未来  
アプローチ③「〈日本意識〉の現在—東アジアから」

## 第 2 回東アジア文化研究会

### 勝海舟の中国観

- 報告者：上垣外 憲一（大妻女子大学比較文化学部教授）
- 日 時：2013 年 5 月 29 日（水）18：30～20：30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー 25 階 B 会議室
- 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所専任所員、教授）

勝海舟は、日清戦争の最中からこの戦争は名分のない戦争であるという談話を新聞紙上に発表し、下関講和条約の締結後も政府の外交方針を批判し続けた。

勝は幕末、軍艦奉行であった時代（1862 年、文久二年）から一貫して東亜の三国が連携して西洋列強の東洋進出に対抗するという東亜同盟論者であり、この勝の東亜同盟論はその後一生を通じて変わらなかった。

勝海舟の日清戦争観は、『氷川清話』に収められている次の漢詩に意が尽くされている。

隣国交兵日。其軍更無名。  
隣国兵を交ふるの日 その軍更に名無し  
可憐鶏林肉。割以与魯英  
憐れむべし鶏林の肉 割きて以て魯英に与ふ

鶏林は古代新羅王国の首都、慶州の美称であり、朝鮮全体をこの場合指す。日清があい争ったことで、ロシアとイギリスに朝鮮進出の隙を与えて、結局彼らに「漁夫の利」を占めさせることになることを、戦争のはじめの段階からというより、戦争の始まる前から勝は予想していたのである。

日清戦争中にこの詩を記し、公表した勝海舟に対し、「無名のいくさ」、名分の無い戦争とは、陛下の勅語も出たあとにあまりにもひどいではないか、と言ったところ、なにこれで全くかまわない、と勝海舟は批判をまったく意に介しなかったという。

日清戦争は「道義」という点から言って、全く正当化されない戦争であるところまではっきり言い切った日本人はいなかった。それは隣国同士が相争うことはお互いの利益にならない「兄弟げんか」であるばかりでなく、日清両国の間に挟まれた韓国を犠牲にするという点で「弱いものいじめ」の戦争であるからである。

勝海舟は朝鮮の大院君と親交があり、朝鮮は衰えきってはいずれ滅びるといふ人がいるけれども、衰退もどん底まで行けば、復活の兆しも現れるものだと、朝鮮の将来に期待していた。したがって日本の対朝鮮の方策は、朝鮮の自立、発展を助けることにあるのであって、どうせ自滅してしまう国であるから清国なりロシアに取られる前に、日本がこれを支配するのだ、という大陸進出論者の論に真っ向から対立するものであった。

小国の朝鮮でさえその自立への願いを尊重するべきなのであるから、潜在的に巨大な経済力を持つ清国は、たとえ今日一つの戦争に敗北しても、その経済的

力は日本は恐れるべきであり、これに軍事的に進出して領土を獲得しようともくろむより、「シナ五億の民衆は日本にとっての顧客」（『氷川清話』）であると考えて、貿易を盛んにして日中両国が共存共栄の方途を探るべきであるというのが、勝海舟の一貫した対中国関係論であった。

勝海舟が海軍の興隆に力を尽くしたのは、海上の安全を確保して、貿易の利益により各国に経済的繁栄をもたらすことが目的であって、戦争に勝利して武勲を輝かすのが目的ではない。外交によって戦争が起こらないように、平和を保って、貿易の利を計るのが日本の戦略であるべきなのであって、日清戦争を起こしてしまったら、その時点で日本、中国が共に傷つくことになるので、日本の取るべき道として既に失敗なのである。

こうした勝海舟の東アジア戦略は、まとまった形ではなく、日清戦争前後に勝海舟の屋敷を訪れた人がインタビューする形で、聞き取り、それが新聞紙上に発表されたものである。したがって断片的な発言から勝海舟の真意を読み取れない読者も多い。しかし、勝海舟の発言をつなぎ合わせてその真意を推測していくと、勝海舟が幕府海軍建設の代表的人物であり、維新後も海軍卿を勤めたという履歴とは違った、意外なほど平和主義者であった勝海舟像が浮かび上がってくる。

それは、勝海舟がこの世で恐ろしいもの二人のうちの一人であるとしていた横井小楠の儒教的な道義、仁義の精神を基本として、日本が先頭に立って全世界の平和を実現するという構想、理想主義を基軸とする平和主義であったのである。横井小楠はしかし、同時に財政が豊かでなければ国は立ち行かないという信念の持ち主であり、国富の増大を国家の方針の基本とする実践においても、彼が指導した福井藩の財政立て直しに短期間に成功するなど、実際の国家運営にも優れた手腕を発揮した人物であった。理想としての平和主義と、その基盤としての国富の増大、これが勝海舟が横井小楠から受け継いだ国家経営論であり、その観点からして、日清両国が一致して東アジアの経済繁栄に協力することが勝海舟の理想であった。日清戦争は道義の上からも、国民経済の繁栄の上からも、勝海舟の信念に全く相反する出来事であったのである。

こうしてみれば、勝海舟の思想と、今日の日本国の平和憲法の思想と全く一致していると言って良いのである。福沢諭吉が今日日本の最高額紙幣の顔であるが、福沢は朝鮮での親日派のクーデターが失敗して以後、一貫して清国を敵視し、日清戦争に日本が勝利し

たときは感極まって泣いたと『福翁自伝』に書いているが、日清戦争を「無名の軍」と断じて批判して止まなかった勝海舟の思想こそが、今日の日本を指導する思想であるべきではないか。百年以上先の中国や朝鮮の復活を見通した勝海舟の慧眼を我々は尊重すべき

なのである。

【記事執筆：上垣外 憲一  
(大妻女子大学比較文化学部教授)】



上垣外 憲一 氏 (大妻女子大学比較文化学部教授)



会場の様子

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)  
 “Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”  
 Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in East Asia”

## 2nd East Asian Culture Research Meeting Katsu Kaishu's View on China

Speaker: Kenichi Kamigaito (Professor, Faculty of Comparative Culture, Otsuma Women's University)  
 Date: Wednesday, 29 May 2013, 18:30-20:30  
 Venue: Hosei University Ichigaya Campus Boissonade Tower 25th Floor Conference Room B  
 Chair: Min Wang (Professor and Full-time Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

In the midst of the Sino-Japanese War, Katsu Kaishu argued in the newspapers that this was a war without justification, and continued to criticise the government's diplomatic policy even after the signing of the Shimonoseki Peace Treaty.

Since his time as navy commissioner (1862), Katsu

was a devoted advocator of an East Asian alliance – a formation of three East Asian countries resisting Western aggressive advancement into the East - and he never deviated from this theory during his lifetime.

Katsu Kaishu's ideal was that Japan and Qing-period China should unite in cooperation towards economic prosperity in East Asia. The Sino-Japanese War was an event in complete opposition to Katsu Kaishu's beliefs from the point of view of morality and economic prosperity of the nations. It is Fukuzawa Yukichi who adorns the greatest value banknote in Japan; yet, since the failed coup d'état in Korea by the pro-Japanese, Fukuzawa viewed Qing China as the enemy, and wrote in *Fukuo jiden* (his autobiography) that he was overcome with tears when Japan was victorious in the Sino-Japanese War. Katsu Kaishu, on the other hand, never ceased to accuse the Sino-Japanese War of fighting between “unknown armies”: surely it is this ideology that should lead the Japan of today? We owe our respect to Katsu Kaishu and his insight that predicted Chinese and Korean recovery more than a hundred years in advance.

Report by: Kenichi Kamigaito (Professor, Faculty of Comparative Culture, Otsuma Women's University)

战略研究基础形成支援项目 研究方法③ “‘对日认识’的现状——以东亚地区为中心”

第2次东亚文化研究会

## 胜海舟的中国观

报告者: 上垣外 宪一 (大妻女子大学比较文化学部教授)

日期: 2013年5月29日(星期三) 18:30-20:30

会场: 法政大学市谷校区 布瓦索纳德大厦25层 B会议室

主持: 王 敏 (法政大学国际日本学研究所专任所员、教授)

胜海舟在中日甲午战争进行到最激烈的阶段时, 曾经在报纸上表示这是一场没有名义的战争, 并且在马关条约签署之后对日本政府的外交方针进行了持续的批判。

胜海舟从幕府末期担任海军专任长官开始(1862年、

文久二年), 一直以来都是一位主张东亚三国携手对抗西洋列强的东亚同盟论者, 这一论调在他的一生中都没有改变过。

中日两国取得一致并共同致力于东亚经济的繁荣是胜海舟的理想。甲午战争不论从道义上说还是从国民经济的繁荣上说, 都是与胜海舟的信念截然相反的。

福泽谕吉的头像被印在日本面额最大的纸币上, 然而福泽却在由朝鲜亲日派所主导的政变失败后, 开始对清朝采取一贯地敌视。他在《福翁自传》中曾写到自己因为甲午战争的胜利喜极而泣。与之相比, 将甲午战争断定为“无名之军”并进行持续批判的胜海舟的思想, 不正应当成为当今日本的指导思想吗? 在百年以前已经预测到中国和朝鲜会复苏的胜海舟, 是值得我们大家所尊重的。

【执笔者: 上垣外 宪一 (大妻女子大学比较文化学部教授)】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업(2010년 ~2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토-<일본의식>의 과거·현재·미래

연구③ <일본의식>의 현재-동아시아를 기점으로

제2회 동아시아문화연구회

## 가쓰 가이슈의 중국관

보고자: 가미가이토 겐이치(上垣外憲一, 오쓰마(大妻)여자대학교 비교문화학부 교수)

일 시: 2013년 5월 29일(수) 18:30~20:30

장 소: 호세이대학교 이치가야 캠퍼스 보아소나드 타워 25층 B회의실

사 회: 왕 민(王敏, 호세이대학교 국제일본학연구소 전임연구소원, 교수)

가쓰 가이슈(勝海舟)는 청일전쟁이 한창인 때부터, 이 전쟁은 명분 없는 전쟁이라는 담화를 신문지상에 발표하고 시모노세키강화조약 체결 후에도 정부의 외교방향을 계속해서 비판했다.

가쓰는 에도막부 말기, 군함 봉행(軍艦奉行)이 있었던 시대(1862년)부터 동아시아 3국이 연대해 서양열강의

동양진출에 맞서야 한다고 일관되게 주장을 했던 동아(東亞)동맹론자다. 가쓰는 그 후에도 그의 일생을 통해 동아동맹론을 주장했다.

청·일 양국이 하나가 되어 동아시아의 경제번영에 협력하는 것이 가쓰 가이슈의 이상이었다. 청일전쟁은 도의적인 면에서도 국민경제의 번영이라는 면에서도 가쓰 가이슈의 신념과는 완전히 상반되는 것이었다.

후쿠자와 유키치(福澤諭吉)는 일본 최고액 지폐에 얼굴이 새겨져 있지만, 그는 조선에서 친일파 쿠데타가 실패한 이후 끝까지 청나라를 적대시했으며 청일전쟁에서 일본이 승리했을 때는 감격한 나머지 울었다는 이야기가 『후쿠옹자전(福翁自伝)』에 기록되어 있다. 청일전쟁을 ‘무명(無名)의 군(軍)’이라고 단정짓고 비판을 멈추지 않았던 가쓰 가이슈의 사상이야말로, 지금의 일본을 이끌어가는 사상이어야 하지 않을까. 백 년 앞 중국의 미래와 조선의 부활을 예견한 가쓰 가이슈의 혜안을 우리는 존중해야 할 것이다.

【기사집필: 가미가이토 겐이치

(오쓰마여자대학교 비교문화학부 교수)】

## 第 3 回東アジア文化研究会

# 近代東アジアの文脈における日本語：中国人日本語学習史からの視点

- 報告者：沈 国威（関西大学外国語学部教授）
- 日 時：2013 年 6 月 26 日（水）18：30～20：30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所専任所員、教授）

中国の研究者劉進才氏は、アンダーソンが提起した近代民族主義の発生と民族国家の言語：国語の形成との関連について、「ヨーロッパ各民族言語の形成において、それぞれの現代民族国家の言語の誕生は古い神聖言語：ラテン語、ギリシア語、ヘブライ語の束縛から脱却し、地域方言へ接近し、また現代的印刷術により各方言地域において書面語を確立させた結果である」と解説し、また、「清朝末期の中国にとって、民族主義の発生と印刷言語の形成はヨーロッパと同じではない」とも指摘している。中国はヨーロッパと同じではない。特に印刷言語の面では同一視できないとの主張は肯けるが、近代におけるアジア諸国の国語形成は、個別言語の問題である以前に、漢字文化圏内の国・地域が如何に民族国家として国語を獲得するかという東アジア全体が直面する近代的な課題を解決しなければならぬという点において、むしろヨーロッパと多くの類似性を有する。われわれは問題意識を伝統的な言語が近代民族国家の言語に進化していくという側面まで拡大させる時、次のような事実と直面するであろう。つまり表意文字の漢字は、片方では「神聖言語」の古典性を有しながら、片方では言語を超越する書写記号体系になりうるという現実である。漢字は、漢字文化圏に言語の記録手段を提供するのだが、同時に漢字によって記録された古典は、文章の規範を示しているのである。漢字によって表現が可能となったが、その表現の自由度が漢文によってまた厳しく制限されている【1】【2】。

- 【1】 劉進才、『語言運動與中国現代文学』、中華書局、2007 年 13～14 頁。
- 【2】 安德森著、吳叡人訳、『想象的共同体』、上海人民出版社、2005 年、38～47 頁。

従って域内の各国の近代国語の成立は、まず脱漢文の過程を経なければならぬが、漢字はたやすく切り捨てることができなかつた。例えば日本では明治初期から様々な議論があり、また実際の施策も数多く試みられたが、漢字の地位は揺るぎなかつた。それどころか、漢字文化圏は正に古い漢字によって西洋の近代知識を受容しえたのである。現在、すでに自らの言語の表記体系から漢字を排除した国家、地域でも大量の漢字音が相変わらず書面語の主要な部分を占めている。

日本語が近代国家の国語へ変身するプロセスにおいて漢字語が決定的な役割を果たした。漢字語の存在によって日本語は国と地域にとって、迅速に新しい知識を取り入れる可能性を有する言語として、漢字文化圏において初めて非母語話者の習う対象となり、漢文（古典中国語）の役割が変化した。かくして東アジアが西洋の知識を受容するに当たり、日本語が他の言語

に大きな影響を及ぼすことになる。

しかし、日本語の学習に関しては植民地支配、植民地における言語政策の推進を背景にある台湾や朝鮮半島の事情と異なり、中国は、むしろ自ら進んで日本語を学習し、日本書を翻訳しようとしたのである。お雇い日本人の招聘や日本留学のブームなど、いずれも明治初期の日本に似ている主体性が保たれていた。筆者の最近の研究の興味は近代以後——日清戦争から五四運動までの間に中国人はいかに日本語を認識し、それをマスターするようになったのか。言い換えれば、中国人の日本語知識獲得の歴史と日本語翻訳集団の形成史である。それまでに全く存在感のない日本語が短期間に学習の対象になり得た理由、中国の民衆は日本經由で西洋の知識を取り入れることに躍起になった経緯、動機付けなどについて、筆者は「中国における近代知の受容と日本」「日本発近代知への接近——梁啓超の場合」で考察したことがある。この講演では、日本知識に対する中国人の意識変化と梁啓超による日本語速成的学習法の提唱に焦点を絞って考察する。

日本語との遭遇により中国語は大きな影響を受けた。その影響は主に人（中国人留学生、お雇い日本人〔日本教習と呼ばれていた〕）、書物（教科書、英語辞書、翻訳書）、媒体（各種の新聞雑誌）によってもたらされてきたことを具体的な事例で確認することができる。

漢字とそれによって記録されている典籍の間に切っても切り離せない関係が存在しない【3】【4】。

- 【3】 沈国威編『漢字文化圏諸言語の近代語彙の形成——創出と共有』所収、関西大学出版部、2008 年、1～41 頁。
- 【4】 『東アジア文化交渉研究』第 2 号、2009 年、217～228 頁。

近代語彙体系の形成に限って言えば、中国語は日本語より数千の新語、訳語を手に入れた。換言すれば、現代中国語の語彙体系の中に、数千にのぼる語がその形成過程において日本語と何らかの関係をもったことになる。語数にせよ、意味上の重要性にせよ他の言語からの外来語とは比較にならないほど日本語の影響は深刻なものであった。同時に語彙以外の問題についても、考えなければならない。即ち近代知は日本借用語を媒介として中国に導入されたことは周知の事実である。直接日本の訳語を利用することは訳語制作の手間が省かれたが、日本語による意味用法上の影響も避けられないであろう。このような影響を点検することにより、中国は西洋の新概念を導入する際、日本とのインターアクションが明らかになるであろう。

【記事執筆：沈 国威（関西大学外国語学部教授）】

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)

“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”

Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in East Asia”

3rd East Asian Culture Research Meeting

## Japanese in the Context of Modern East Asia: A View from the History of Learners of Japanese in China

Speaker: Guowei Shen (Professor, Faculty of Foreign Language Studies, Kansai University)

Date: Wednesday, 26 June 2013, 18:30-20:30

Venue: Hosei University Ichigaya Campus, '58 Building 2F Research Center for International Japanese Studies Seminar Room

Chair: Min Wang (Professor and Full-time Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

Until the modern era, Japanese had never been an important language in the aspects of trade activities, transmission of the classics, or even the reception of new knowledge – unlike Kanbun (texts in Chinese) which

had long been the steadfast written language of countries embracing Kanji culture. However, from the early Meiji period, Japanese quickly began to rise towards becoming the language of the nation state. The Japanese language linked itself to Western civilisation, and stood up to the task of transmitting modern knowledge. It then became a learning focus for many East Asian countries, and exerted great influence upon other languages. Although Taiwan and the Korean Peninsula have histories of enforcement of a language policy under colonial rule, modern China differs in that it took its own initiative to learn Japanese. This presentation traced the encounter with Japanese and the history of learners of Japanese in China, particularly during the period between the Sino-Japanese War and the Goshi Undo (anti-imperialist movement in Peking, 1919). It used the example of Liang Qichao to illustrate how Chinese people perceived the Japanese language and whether they were able to master it.

Keywords: National Language, Kanbun (texts written in Chinese characters), Shinkango (new words of Chinese origin), Japanese Learning, Language Policy

Report by: Guowei Shen (Professor, Faculty of Foreign Language Studies, Kansai University)

战略研究基础形成支援项目 研究方法③ “‘对日认识’的现状——以东亚地区为中心”

第3次东亚文化研究会

## 近代东亚脉络中的日语： 以中国人日语学习史为视点

报告者：沈 国威（关西大学外国語学部教授）

日期：2013年6月26日（星期三）18:30-20:30

会场：法政大学市谷校区 58年馆2层 国际日本学研究所讲习室

主持：王 敏（法政大学国际日本学研究所专任所员、教授）

与长时间作为汉字文化圈书面语的汉语不同，近代以

前的日语不论从商业活动、古典传承、新知识的吸收等任何一个方面来说都不是重要的语言。然而当日本进入明治时期之后，日语迅速成长为民族国家的国语，并开始肩负连接西方文明、传播近代知识的重任。因而日语很快成为了东亚各国的学习对象，并对其它的语言产生了极大的影响。与成为殖民地并被强制推行语言政策的台湾和朝鲜半岛等不同，近代中国对日语的学习是自发式地展开的。那么在日语成为国语的过程中，以及近代以后——特别是从甲午战争到五四运动之间，中国人是如何认识日语又是如何掌握日语的呢，本报告以梁启超为例，对中国人的日语学习史进行了探究。

关键字：国语 汉文 新汉语 日语学习 语言政策

【执笔者：沈 国威（关西大学外国語学部教授）】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업(2010년~2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토-<일본의식>의 과거·현재·미래

연구③ <일본의식>의 현재-동아시아를 기점으로

제3회 동아시아문화연구회

## 근대 동아시아 문맥에서 본 일본어 -중국인 일본어 학습사의 시점에서-

보고자: 첸 귀웨이(沈国威, 간사이(關西)대학교 외국어학부 교수)

일시: 2013년 6월 26일(수) 18:30~20:30

회장: 호세이대학교 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실

사회: 왕 민(王敏, 호세이대학교 국제일본학연구소 전임연구원, 교수)

오랫동안 한자 문화권의 문장어로서 자리매김한 한문과 달리, 일본어는 근대까지 상업활동, 고전의 전승, 새로운 지식의 수용 등, 어느 면에서도 중요한 언어가 아니었다. 그러나 메이지(明治)기에 들어서면서 일본어는 민족국가의 국어로 빠른 성장을 이루었다. 서양문명과 결부되면서 근대 지식을 전하는 언어가 된 일본어는 동아시아 여러 나라에서 학습의 대상이 되었으며, 다른 언어에 절대적인 영향을 미쳤다. 식민지 지배 당시, 식민지에 대한 언어정책 추진을 배경으로 한 대만과 한반도의 사

정과는 달리, 근대 중국은 오히려 스스로 나서서 일본어를 배우려고 했다. 일본어가 근대국가의 국어로 변화하는 과정, 그리고 근대 이후, 특히 청일전쟁에서 5·4운동까지 중국인은 어떻게 일본어를 인식하고 마스터하려 한 것인가에 대해, 양계초(梁啓超)를 예로 들어 일본어와의 만남, 중국인의 일본어 학습 역사를 되돌아 보았다.

키워드: 국어, 한문, 신한어, 일본어 학습, 언어정책

【기사집필: 첸 귀웨이 (간사이대학교 외국어학부 교수)】



沈 国威氏 (關西大学外国語学部教授)

## 第 4 回東アジア文化研究会

# 「東アジアから考える」はいかにして可能か？ —日中思想交流経験を中心として—

- 報告者：黄 俊傑（国立台湾大学人文社会高等研究院長、教育部国家講座教授）
- 通訳者：周 曙光（法政大学国際日本学研究所学術研究員）
- 日 時：2013 年 7 月 4 日（火） 18：30～20：30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー 26 階 A 会議室
- 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所専任所員、教授）

### 一、はじめに

二十世紀のアジア知識人におけるアジア観には主として二つの見方があった。脱亜論と興亜論である。この両者は共に東アジア文化の主体性の問題に連なるものであった。脱亜・興亜ともに、その言論の核心にあったのは東アジア文化の主体性の解消か、構築かという問題だったからである。

### 二、「東アジア」とは

#### （一）政治システムとしての「東アジア」

東アジアは一つの政治的単位である。その意味で東アジアは四つの歴史的発展過程を歩んできた。第一段階は二十世紀以前の中華帝国を中心とする華夷秩序、第二段階は二十世紀上半期の帝国日本を中心とする大東亜共栄圏、第三段階はアメリカを中心として東アジアに構築された冷戦秩序、第四段階は中国の改革開放以後に形成された大中華経済圏である。

この四段階の歴史的変化から見ると、数千年にわたる東アジアの政治的交流と影響関係とは、権力の「中心」国家と「辺境」国家という不対等状況において行われてきたと言うことができる。また、各段階において、権力の「中心」が衰える度毎に新興の政治・軍事的エネルギーがそれぞれの政治的言論を生み出し、政治的軍事的行動を引き起こして、それ以前の「現実の東アジア」を将来の「理想の東アジア」へと転化しようとしたことも見てとれる。

#### （二）文化システムとしての「東アジア」

また、東アジアはより広義には一つの文化システムでもあり、その意味での東アジアには発展の全体性・構造の類似性もあった。十四世紀以降、東アジア地域の読書人達は朱子学を基礎とする儒学の共通価値を分かち合い、仏教も中国を経由して朝鮮や日本へと伝わって東アジア民衆の信仰の一つとなった。また、近世東アジア知識人の文化的素養こそは漢字であり、「氣」論を基礎とする伝統医学も共有されていた。

文化システムとしての東アジアという観点から見ると、中華文化は朝鮮・日本・ベトナムといった周辺国家にとって、数千年にわたって「重要な他者」の役割を演じてきた。しかし近代になると、ヨーロッパ文化が「不在の重要な他者」として、各国の文化と思想動向とを揺り動かすことになる。

二十一世紀に入った今、そうしたヨーロッパ文化による東アジア文化支配という構図について再考しなけ

ればならない。そこに「東アジアから考える」ことの重要性を訴える必要が生じるのである。

### 三、どのように「東アジアから考える」のか？

#### （一）中西比較文化史的視点

「東アジアから考える」という問題の提示方法には、比較文化史的視点が潜在している。比較という観点においてのみ、我々は伝統的な中国思想家が「特殊性」から抽出した「普遍性」がある種の「具体的普遍性」であることを確認することができ、また、「東アジアから考える」ことでその意義を獲得することが可能になるのである。

#### （二）東アジア文化の「普遍性」と「特殊性」

また、「東アジアから考える」という問題提示は、東アジア各国の文化と思想の間の類似性と差異性とに關係している。東アジア各国文化共通の文化的要素から見ると、東アジア文化圏は確実にヨーロッパ文化の一体性や類似性とは異なる。しかし、中国・日本・韓国といった各国文化間の差異性から見る時、東アジア各国の共通点もその相違を覆い尽くすことはできない。それは、東アジア文化圏が思想・制度が錯綜し、諸民族が相互に競争しつつも交流し合い、多くの国家や民族が敵対し協力し合う空間でもあるからである。東アジア文化圏における価値概念や哲学的政治的命題は、それが中国に由来するものであっても、朝鮮・日本への伝播後、各地域の特色を具えた思想や文化へと発展して相違が生じることになる。

したがって、我々の言う「東アジアから考える」ことは、東アジア各国文化の普遍性を通観するのみならず、各国文化の特殊性を理解することによって、始めて偏見のないものになるのである。つまり、東アジア内相互の影響と衝突から考えることで、始めて同時に東アジア各地域文化の普遍性と特殊性とを把握することができるのである。

### 結論

二十世紀における東アジア各国の人文社会科学研究は、問題意識や研究方法の点で欧米における学術典範の支配を受けてきた。さすれば、「東アジアから考える」ことは、二十一世紀の東アジア研究者が深慮すべき課題であろう。筆者は嘗て東アジア文化交流史研究は交流の静態的結果のみならず、交流の動態的過程をも重視すべきだと主張したことがある。本文では、東

アジア文化交流史の過程を東西比較及び東アジア内各国の比較という脈絡において検討を加え、各地の文化的伝統の普遍性と特殊性とを同時に把握することで、文化的政治的民族主義に陥ることを免れ得るとも指摘したのである。

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)  
“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”  
Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in East Asia”

4th East Asian Culture Research Meeting

## How to “Think from East Asia”? An Inquiry Focusing on the Experience of Intellectual Exchange between Japan and China

Speaker: Chun-chieh Huang (National Chair Professor & Dean, National Taiwan University Institute for Advanced Studies in Humanities and Social Sciences, National Taiwan University)

Interpreter: Shuguang Zhou (Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

Date: Tuesday, 9 July 2013, 18:30-20:30

Venue: Hosei University Ichigaya Campus Boissonade Tower 26F Conference Room A

Chair: Min Wang (Professor and Full-time Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

This presentation discussed methods of research of East Asia, centring on the experience of ideological exchange between Japan and China.

First of all we saw that there was friction between the theories of Datsu-A “Asian disassociation” and Kou-

【記事執筆：黄 俊傑

(国立台湾大学人文社会高等研究院院長、教育部国家講座教授)、  
日本語訳：工藤 卓司

(致理技術学院応用日語系助理教授)】

A “Asian revival” in the debate surrounding the future of Asia among 20th-century Asian intellectuals. The problem common to both, we discovered, concerns the dissolution and construction of East Asian subjectivity.

We then considered the point that “East Asia” is both a political system as well as a cultural one. For several thousands of years politics and cultural exchange in East Asia were carried out under the unbalanced situation of “centre” and “border”. If the centre waned, the border provided a new initiative, which transformed the Asia of reality into an Asia of ideals. Before the modern era China was “the important other” in East Asia, but since the modern era the West has become “the absent important other” that has exerted deep influence upon the politics and culture of East Asia.

Lastly, we heard how 21st-century “thought emanating from East Asia” should take as its standpoint a comparison of Chinese-Western cultural history to shed light on the “universality” and “peculiarity” of East Asian inner culture.

Keywords: East Asia, Datsu Ajia (Asian disassociation), Kou Ajia (Asian revival), Chinese World Order, Specific Universality

Report by: Chun-chieh Huang (National Chair Professor & Dean, National Taiwan University Institute for Advanced Studies in Humanities and Social Sciences, National Taiwan University)

Translated by: Takushi Kudo (Assistant Professor, Chihlee Institute of Technology, Department of Applied Japanese)

战略研究基础形成支援项目 研究方法③ “‘对日认识’的现状——以东亚地区为中心”

第4次东亚文化研究会

## 如何“从东亚出发思考”？

——以中日思想交流经验为中心——

报告者：黄 俊杰（国立台湾大学人文社会高等研究院院長、教育部国家講座教授）

翻译者：周 曙光（法政大学国际日本学研究所学术研究员）

日期：2013年7月4日（星期二）18:30-20:30

会场：法政大学市谷校区 布瓦索纳德大厦26层 A会议室

主持：王 敏（法政大学国际日本学研究所专任所员、教授）

此次报告以中日思想交流经验为中心，论述了东亚研究的几个方法论问题。

首先，指出20世纪亚洲知识分子对亚洲前途的论述，

在脱亚与兴亚之间挣扎，双方论述虽然对立，但都涉及东亚主体性的解消或建构之问题。

其次，“东亚”既是一个政治系统，也是一个文化系统。数千年来东亚各国政治互动与文化交流，是在「中心」与「边陲」权力与文化均不对等的状况之下进行，所以，每当“中心”式微之际，“边陲”地区就提出新论述，冀图将当前实然的东亚转化为未来应然的东亚。在近代以前的东亚文化圈中，中国是“重要的他者”。在19世纪中叶以后东亚各国的互动中，西方则是“不在场的重要他者”，处处牵动东亚各国的政治与文化动向。

最后，揭示21世纪“从东亚出发思考”必须采取中西比较文化史的视野，也必须聚焦东亚内部文化的“共性”与“殊性”，以及东亚内部各国之间的紧张、衝突与交互影响。

关键字：东亚、脱亚、兴亚、华夷秩序、具体的共相

【执笔者：黄 俊杰

(国立台湾大学人文社会高等研究院院長、教育部国家講座教授)、  
日文翻译：工藤卓司（致理技术学院应用日語系助理教授)】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업(2010년~2014년)  
국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토-<일본의식>의 과거·현재·미래  
연구③ <일본의식>의 현재-동아시아를 기점으로  
제4회 동아시아문화연구회

## 「동아시아를 기점으로 한 사고」는 왜 가능한가

### —일·중 사상교류 경험을 중심으로—

보고자: 황 준지에(黃俊傑, 국립대만대학교 인문사회고등연구원장, 교육부 국가강좌 교수)

통역: 쉰 슈광(周曙光, 호세이대학교 국제일본학연구소 학술연구원)

일시: 2013년 7월 4일(화) 18:30~20:30

장소: 호세이대학교 이치가야 캠퍼스 보아소나드 타워 26층 A회의실

사회: 왕 민(王敏, 호세이대학교 국제일본학연구소 전임연구원, 교수)

이번 연구회에서는 일·중 사상교류의 경험을 중심으로 동아시아 연구방법에 대해 논하였다. 먼저, 20세기 아시아 지식인들이 아시아의 미래에 대해 논술한 것은 탈아

(脫亞)와 흥아(興亞) 사이에서 갈등하는 것이었으나 이 모두 동아시아의 주체성 해소와 구축에 관한 문제였다 고 지적했다.

다음으로 '동아시아'가 정치시스템이자 문화시스템이라는 점에 대해 고찰하였다. 수천 년 이래, 동아시아의 정치·문화 교류는 '중심', '변방'의 불균등한 상황 속에서 진행되었다. 중심이 쇠퇴하면 변방이 새로운 주장을 내세워, 현재의 아시아를 이상적인 아시아로 바꾸려 하였다. 근대 이전 동아시아에 있어서 중국은 '중요한 타자(他者)'였지만, 근대 이후에는 서양이 '부재중인 중요한 타자'가 되어 동아시아의 정치 문화에 큰 영향을 끼치게 되었다.

마지막으로 21세기의 '동아시아를 기점으로 한 사고'는 중국·서양 문화사의 비교 관점을 도입해야 한다는 것과 동아시아 내 문화의 '보편성'과 '특수성'에 초점을 맞춰야 할 것이라고 말했다.

키워드: 동아시아, 탈아시아, 흥아시아, 화이질서, 구체적인 보편성

【기사집필: 황 준지에

(국립대만대학교 인문사회고등연구원장, 교육부 국가강좌 교수)

일본어 번역: 구도 다쿠시

(工藤卓司, 치리(致理)기술학원 응용일본어계 조리(助理)교수)】



黃俊傑氏  
(國立台灣大學人文社會高等研究院長、教育部國家講座教授)



通訳: 周曙光氏 (法政大學國際日本學研究所學術研究員)



司會: 王敏氏 (法政大學國際日本學研究所專任所員、教授)



會場の様子

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）  
国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討—〈日本意識〉の過去・現在・未来  
アプローチ③「〈日本意識〉の現在—東アジアから」

## 第 5 回東アジア文化研究会

### 傅抱石の日本留学とその影響 — 傅抱石書簡・金原日記を読む

- 報告者：廖 赤陽（武蔵野美術大学造形学部教授）
- 日 時：2013 年 9 月 25 日（水）18:30～20:30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー 25 階 B 会議室
- 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所専任所員、教授）

#### 一. 問題意識と基本史料

傅抱石（1904-1965）は現代中国を代表する中国画家・篆刻家・美術史家・美術理論家・美術教育家の一人である。1932 - 1935 年日本留学、1934 年帝国美術学校研究科に入学、東洋美術史家・美術理論家・美術教育家である金原省吾（1888-1958）に師事した。

傅抱石の日本留学は、美術史家と画家の個人としての成長に大きな影響を与えたのみならず、中国現代美術史、近代以来における中国人の日本留学史、中国知識人の日本観、及び日中文化交流史ないし日中関係史、近代・西洋と東アジアという地域の理解など、多くの課題を生み出している。傅抱石本人は日本留学の経歴についてほとんど語らなかったが、本研究は、武蔵野美術大学所蔵の傅抱石から金原省吾宛ての書簡（1934.7～1956.9、延べ 21 通。以下、書簡と略す）及び同大学翻刻の金原省吾日記（1934.3～1948.6 延べ 96 日、以下日記と略す）の解説を通して、傅抱石の日本留学とその影響の解明を試みる。

#### 二. 傅抱石の日本留学

傅抱石の第一次日本留学は 1932 年 9 月、景德鎮陶芸改進の名義での日本留学であった。その後、1933 年 8 月再び日本へ、翌年 3 月、帝国美術学校の研究科に入学を許可され、金原省吾に東洋美術史と絵画理論、東洋美学、清水多嘉示に彫刻、川崎小虎、山口逢春、小林巢居人に絵画を学んだ。留学中執筆したものは（帰国の後公刊されたものを含む）「論顧愷之至荊浩之山水画史問題」、「苦瓜和尚石濤年表」など論文六通、金原著書の中国語訳『唐宋之絵画』、著書『中国絵画理論』、『刻印概論』（『摹印学』の改定）などの著訳書のほか、1935 年 5 月に銀座松坂屋で個展を開き、山水、人物、花鳥、書、篆刻（印章）など 177 件展示され、その他、印譜、篆刻拓本 190 点を創作し、精力的な活動を行った。翌月、母の危篤の知らせを受け急遽帰国その後、徐悲鴻の招聘により中央大学芸術科の講師となり、中国美術史と国画概論の授業を担当。

#### 三. 傅抱石と金原省吾

書簡と日記から見れば、留学中、傅抱石は金原省吾と非常に密接な関係を保ち、多い時には 2～3 日に一回金原宅を訪ねる。傅は自らの家庭事情・経済事情、個展の会場、推薦状、作品の題賛、アパート探し、帰国後の仕事、生活、悩み、書籍・論文の寄贈、薬品や画材の購入など、悉く金原に相談した。研究上、

金原の指導は主に「画論は一冊づつの古典研究とその整理」（日記 1934.4.13）を通しての理論訓練と史料の実証分析であり、また、傅の論文の指導と添削を行って日本での発表先を推薦し、個展開催を全力で応援した。

同時に、傅も金原に中国画の技法の説明を行いその著作の訂正・翻訳及び中国での出版紹介などを行い（書簡 1934.8.15）、まさに学問を切磋琢磨し、教学を相長する師弟関係であった。日中戦争中金原省吾は度々「抱石君どうしてゐるか」（日記 1947.10）と傅抱石への心配を日記に記し、戦火を経て、十年ぶりに傅抱石からの手紙が届けられ（書簡 1947.6.19）た時、金原は「よんでいて涙うかぶ」（日記 1947.7.4）と記した。

#### 四. 日本留学が傅抱石に与えた影響

##### 1. 学術研究における日本留学の影響

金原省吾は傅抱石の『中国絵画理論』のための序文を書く時、「抱石君自身の意見がない。そして皆古書からの摘要だ」（日記 1934.10.22）、と自らの感想を述べた。しかし、帰国の後、地味な実証研究と優れた理論分析を結んだ研究を次から次へと世に送り出し、傅抱石は美術史家として著しい成長を見せた。彼の研究の重心は二つあり、一つは中国美術の転換期の東晋六朝であり、もう一つは円熟期の明清交代期である。その出発点となる二本の論文——「論顧愷之至荊浩之山水画史問題」・「苦瓜和尚年表」は、いずれも日本留学期間で執筆したものである。

##### 2. 絵画創作における日本留学の影響

1942.10、「傅抱石教授画展」（壬午重慶個展）が開催され、画壇における彼の名声が遂に確立された。その画風は、銀座松坂屋個展作品と驚くほど異なる。留学前、石濤の模倣や文人画の形式を抜けられず（独学で特定の師承と画派に属していないことも、のちに日本画壇の影響を受け入れやすい理由の一つと考えられる）。留学後、学術的な研究及び日本画壇から受けた刺激は数年間の沈澱・消化を経て、遂に四川の山水の靈氣に生まれ、「悲家国之顛破・不肯俯仰事人」という強い抗戦意志とともに画風を一変して大成の域に達した。

##### 3. 傅抱石の日本「情結」（コンプレックス）

留学前、傅抱石は中国画の伝統を固守する姿勢を見せたが、留学後、彼は日本画の革新と中国画の停滞を鑑み、中国画の改革の緊迫性を唱えた。同時に、日本に学ぶことを日本化ではなく、中国が失われた

ものを取り戻すに過ぎないとも強調した。抗日戦争中、彼は第三庁に加わり積極的に抗日宣伝活動を行ったが、その作品は、民衆好みに合わせた抗日宣伝画ではなく、隠士・仕女・屈原・蘇武・石濤和尚などの人物故実や祖国の山河であり、高古の風格を漂わせ、孤高・虚無の中に凜とした内在する緊張感を満たしている。金原省吾はかつて中国の国民性と芸術に関して、「天」・「老」・「無」・「隠」・「淡」などと捉

えるが、傅抱石はその一文を中国語に訳し、また老境に満ちた筆を以てこれを表現した。彼はさらに中国美術の消極と譲歩の中から「雄渾」・「樸茂」・「沈着」・「潜行」及び高尚な人格形成などの前進的・積極的価値を見出し、これに抗日戦争必勝の信念を託した。

【記事執筆：廖 赤陽（武蔵野美術大学造形学部教授）】



廖 赤陽氏（武蔵野美術大学造形学部教授）



会場の様子

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)  
“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”  
Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in East Asia”

## 5th East Asian Culture Research Meeting

### Fu Baoshi's Study in Japan and Its Influence: Reading Letters by Fu Baoshi and the Diary of Kimbara Shogo

Speaker: Chiyang Liao  
(Professor, College of Art and Design, Musashino Art University)  
Date: Wednesday, 25 September 2013, 18:30-20:30  
Venue: Hosei University Ichigaya Campus Boissonade Tower 25F Conference Room B  
Chair: Min Wang (Professor, and Full-time Researcher Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

This research sheds light on Fu Baoshi's period of study in Japan and its influence, using letters sent from Fu

Baoshi to Kimbara Seigo now housed in Musashino Art University, and Kimbara Seigo's diary that has been reprinted by Musashino Art University.

The deep master-pupil friendship between Fu Baoshi and his teacher, Kimbara Seigo continued beyond his period of study in Japan, through wartime and into the post-war era. The two pillars of scholarship in art history by Fu Baoshi: Eastern Jin of the Six Dynasties (from Gu Kaizhi to Jing Hao) and Ming-Qin Transfer Period (Shitao) were both begun in earnest during his period of study in Japan. Also, on returning home to China, his painting style changed, so that the stress that he put upon the reforms in Chinese painting can be attributed to stimulus from Japanese painting circles. Kimbara Seigo knew the spirit of Chinese art to consist of “ancient”, “nothingness”, “concealment”, and “light” etc. During the war against Japan, Fu Baoshi continued to paint solitary recluses and patriots of old, exhibiting through the brush of his own advanced years an engrossed and indomitable spirit that believed wholeheartedly in a Chinese victory.

Report by: Chiyang Liao (Professor, College of Art and Design, Musashino Art University)

战略研究基础形成支援项目 研究方法③ “‘对日认识’的现状——以东亚地区为中心”

第5次东亚文化研究会

### 傅抱石的日本留学与其影响 —读傅抱石书信·金原日记

报告者: 廖 赤阳 (武藏野美术大学造形学部教授)  
日期: 2013年9月25日 (星期三) 18:30-20:30  
会场: 法政大学市谷校区 布瓦索纳德大厦25层 B会议室  
主持: 王 敏 (法政大学国际日本学研究所专任所员、教授)

在武藏野美术大学, 藏有傅抱石写给金原省吾的书

信、及该大学翻刻的金原省吾日记, 本项研究以此为基础, 探明了傅抱石的日本留学经历及其影响。

傅抱石与其恩师金原省吾之间的师生之情不仅仅停留在其留日期间, 更是超越战火、直至战后。作为傅抱石美术史研究的两大成就, 东晋六朝 (从顾恺之到荆浩) 与明清交代期 (石涛) 两者都是在其留学期间正式开始的。回国后他的画风发生改变并极力主张中国画的改革, 也是因为受到了日本画坛的刺激与影响。金原省吾将中国美术的精神总结为“天、老、无、隐、淡”等, 而抗日战争中的傅抱石也正是这样, 持续不断地描绘孤高的隐士与忧国的古人, 表达出其潜心·不屈的精神以及对抗战必胜的信念。

【执笔者: 廖 赤阳 (武藏野美术大学造形学部教授)】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업(2010년~2014년)  
국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식> 재검토-<일본의식>의 과거·현재·미래  
연구③ <일본의식>의 현재-동아시아를 기점으로  
제5회 동아시아문화연구회

### 푸바오스의 일본 유학과 그 영향 —푸바오스 서한·긴바라의 일기를 읽다

보고자: 리아오 치양 (廖赤陽, 무사시노(武藏野)미술대학교 조형학부 교수)  
일 시: 2013년 9월 25일(수) 18:30~20:30  
장 소: 호세이대학교 이치가야 캠퍼스 보야소나드 타워 25층 B회의실  
사 회: 왕 민(王敏, 호세이대학교 국제일본학연구소 전임연구소원, 교수)

본 연구는 무사시노미술대학교 소장의 푸바오스(傅抱石)가 긴바라 세이코(金原省吾)에게 보낸 서한 사료(史料) 및 이 대학교의 번각본인 긴바라 세이코의 일기를 바탕으로 푸바오스의 일본 유학과 그 영향에 대해

밝힌 것이다.

푸바오스와 그의 은사인 긴바라 세이코의 돈독한 사제간 우정은 유학 기간뿐만 아니라 전시 그리고 전후에 이르기까지 계속되었다. 푸바오스의 미술사 연구에 있어 두개의 축인 동진 육조시대의 고개지(顧愷之), 형호(荊浩)와 명청교체기의 석도(石濤)에 관한 연구는 모두 유학 시절부터 본격적으로 시작된 것이다. 또한, 귀국 후 그의 화풍이 크게 변한 것과 중국화(畵)의 개혁이 긴박하다고 역설한 것도 일본 화단(畵壇)에서 받은 자극과 결코 무관하지 않다.

긴바라 세이코는 중국 미술의 정신을 ‘老’ ‘無’ ‘隱’ ‘淡’ 등으로 해석한 반면, 항일전쟁 중의 푸바오스는 고고한 은자(隱者)와 우국의 고인(古人)을 화폭에 담으며 노련한 붓끝에 온 신경을 모아 불굴의 정신을 발견하고 그 붓끝에 중국이 반드시 이긴다는 필승의 신념을 담았다.

【기사집필: 리아오 치양

(무사시노미술대학교 조형학부 교수)】

## 第6回東アジア文化研究会

# わが祖父郭沫若と日本 —その異文化体験の意味—

- 報告者：藤田 梨那(国士舘大学文学部教授)
- 日 時：2013年10月30日(水) 18:30～20:30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー 25階B会議室
- 司 会：王 敏(法政大学国際日本学研究所専任所員、教授)

郭沫若は1892年に四川省楽山に生まれた。郭沫若は魯迅と同様、清朝末の旧家に生まれ、豊かな古典教養をもつ。魯迅と比べてより複雑な点は、政治への参与である。1920年代、蒋介石に従って北伐に参加したが、後蒋介石から離脱し、共産党の傘下に入る。抗日戦争を経て、新中国誕生後、副総理に就任、中国科学院院長を歴任する。

政治家の他に詩人という一面があり、『女神』という詩集が代表作である。これは日本で作られ、中国口語詩を確立させたものである。更に、歴史家、考古学者、古代文字研究者、書法家という側面もある。主な著作には、『女神』『星空』『蔡文姬』『屈原』『創造十年』『中国古代社会研究』『甲骨文字研究』等がある。彼の詩歌創作は留学期にスタートし、歴史研究は日本亡命期に始まった。郭沫若の生涯に於いて日本との関わりは重要な意味を持つ。この二つの時期は険悪な日中関係があったのも事実である。

郭沫若87年の人生の中で、3回日本に滞在、都合20年になる。

- 1、留学：1914年～1923年 九州帝国大学医学部
- 2、亡命：1928年～1937年 千葉県市川市須和田
- 3、訪日：1955年11、27～12、26 中国科学者訪日団団長として来日。

留学期の郭沫若は日本で様々な体験をした。とりわけ佐藤富子との出会いは彼の人生を大きく左右する出来事であった。佐藤富子は明治28年仙台に生まれた。幼少時代はミッション学校で過ごし、1914年ミッション学校卒業した頃、両親は彼女の結婚相手を決めたが、富子は反発して、家出をした。彼女は東京にある教会聖口力病院の看護師になった。

1916年郭沫若の友人陳龍驤が肺結核を患って、聖口力病院に入院していた。8月郭沫若は彼を見舞った際、看護師佐藤富子と出会う。これは運命的な出会いと言える。彼は友人田漢宛ての書簡に告白する。「初めて私の安娜を見た時、彼女の眉間に輝く一種不思議な潔光に肅然とした敬愛の念が生じた。思うに、神様が私を憐れんで、失った契己の友人の代わりに一人の淑女を下さし、私の空白を補ってくださった。」(『三叶集』)それからは、彼らは英語と日本語で文通を始めた。彼は初めて自由恋愛を体験した。自由恋愛は次のポイントに於いて彼に大きな役割を果たした。

- 1、詩人の誕生、詩集『女神』の誕生。
- 2、キリスト教への開眼。
- 3、自我の目覚め。
- 4、人生の危機を富子の助けで乗り越えた。

風景の発見も重要な体験である。1914年の夏、彼

は房総北条鏡ヶ浦の海へ行って、初めて海水浴と登山を体験した。その中で故郷の風景を発見した。風景の発見は同時に内面の発見の契機となり、内面の発見につながっていった。彼の口語詩はその一連の発見の中で出現した。『女神』の「筆立山頂の展望」、「登臨」は山登りに関係する詩歌。「海を浴す」「光る海」「砂上の足跡」などは海、水泳と関係する。

1927年蒋介石がクーデターを企て、これまでの国共合作に反旗を翻す。共産党員に対する粛清を開始。郭沫若はそれを批判する文章「請看今日之蒋介石」を発表、蒋介石の逆鱗に触れ、逮捕命令が出された。1928年に郭沫若一家は日本へ逃亡し、1937年7月まで約9年間の亡命生活を送る。その間日々警察に監視されていた。中国古代社会研究と古代文字研究はこの時期に始まる。またマルクスの『政治経済学批判』『ドイツイデオロギー』の翻訳も試みた

1937年日中戦争が始まると、郭沫若は秘密裏に日本を脱出して中国に帰国した。郭安娜は夫を守るため逮捕され、拷問を受けた。1948年郭沫若と再会するまで、ひとりで5人の子供を育てた。その間、様々な苦勞をした。ある日岩波書店社長岩波茂夫がやって来て、郭沫若の長男郭和夫の学費を出す申し出た。岩波さんと郭沫若は面識がなかった。しかし郭和夫が京都大学を卒業するまで岩波さんはその約束を守った。このことは、戦争の中でも日中両国民の良心は依然として生きていた証である。

日本敗戦後、1948年郭安娜は郭沫若と再会し、中国に定住した。1983年郭安娜はアジア・アフリカ平和賞を受賞。1994年101歳でこの世を去った。

郭沫若にとって日本は、風景の発見、自我の目覚めを促した第二の故郷。日本の自然、人文環境は彼に近代詩歌を創造する環境を提供した。

異文化との出会い、交流は、新しい創造に繋がる一方、国家的利害が絡んできた時に常に複雑な様相を呈してくる。その中にいる人々は愛と悲しみ、苦悩をいやでも味わわなければならない。多くの別れ、誤解、流亡、悲劇が生まれる。郭沫若と佐藤富子はそれを体験し、それを生きた人である。

彼らの人生に今日私たちは多くの事を考えさせられる。彼らが生きた時代の問題は今日でもなお存在しているのではないか。国家間の問題、個人間の思い、文化間の交流、このような関係をどう遇したらよいのか?これは私たちがよく考えなければならない問題である。グローバルな文化交流にとって避けられない問題であろう。

【記事執筆：藤田 梨那(国士舘大学文学部教授)】

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)  
“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”  
Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in East Asia”

#### 6th East Asian Culture Research Meeting

### My Grandfather, Guo Moruo and Japan: the Meaning of his Experience of a Foreign Culture

Speaker: Rina Fujita (Professor, Faculty of Letters, Kokushikan University)

Date: Wednesday, 30 October 2013, 18:30-20:30

Venue: Hosei University Ichigaya Campus Boissonade Tower 25F Conference Room B

Chair: Min Wang (Professor and Full-time Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

Guo Moruo (1892-1978) was a poet, historian, archaeologist, paleographer, calligrapher, and politician. His col-

lection of poems, *The Goddesses*, established the Chinese vernacular poem. He stayed in Japan three times for a total period of around 20 years: 1. Period of study in Japan, 2. Period of exile, 3. Visit to Japan in 1955.

During his period of study in Japan, Guo Moruo had various experiences. In particular, his meeting with Sato Tomiko would have great influence upon his life. He experienced a free love affair for the first time. He also swam, went mountain climbing, and prompted discoveries of landscapes and nature. Many poems in *The Goddesses* glorify Mother Nature.

During his period of exile in Japan, he conducted research of ancient Chinese society and ancient scripts, whilst under daily police supervision. When the Sino-Japanese War began in 1937, Guo Moruo fled Japan in secret and returned to China.

For Guo Moruo, Japan was a second homeland in which he discovered natural landscapes and found his true self. The nature and cultural environment of Japan provided him with the setting by which to compose modern poetry.

Report by: Rina Fujita (Professor, Faculty of Letters, Kokushikan University)

战略研究基础形成支援项目 研究方法③ “‘对日认识’的现状——以东亚地区为中心”

第6次东亚文化研究会

### 我的祖父郭沫若与日本——异文化体验的意义——

报告者: 藤田 梨那 (国士馆大学文学部教授)

日期: 2013年10月30日 (星期三) 18:30-20:30

会场: 法政大学市谷校区 布瓦索纳德大厦25层 B会议室

主持: 王 敏 (法政大学国际日本学研究所专任所员、教授)

郭沫若 (1892-1978) 是诗人、历史学家、考古学家, 同时也是古文字学者、书法家、政治家。他的诗集《女神》奠定了中国口语诗的基础。生涯共3次滞留日本, 前

后共有20年的时间, 分别为: 1、留学期。2、流亡期。3、1955年访日期。

留学期间的郭沫若在日本尝试了各种全新的体验, 特别是与佐藤富子的相遇对他的人生产生了很大的影响。在日本他初次体验了自由恋爱, 也体验了游泳、登山、以及对风景与自然的捕捉。《女神》中的很多诗歌都是以讴歌大自然为主题的。

流亡日本期间, 虽然每天都处在在警察的监视中, 郭沫若仍然坚持着对中国古代社会及古文字的研究。当1937年抗日战争开始后, 他秘密逃出日本回到了中国。

对于郭沫若来说, 日本是他发现风景并找到自我的第二故乡。日本的自然及人文环境为他提供了创作近代诗歌的条件。

【执笔者: 藤田 梨那 (国士馆大学文学部教授)】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업 (2010년~2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식> 재검토—<일본의식>의 과거·현재·미래

연구 ③<일본의식>의 현재—동아시아를 기점으로

제6회 동아시아문화연구회

### 나의 조부 귀모뤄와 일본——이문화 체험의 의미——

발표자: 후지타 리나 (藤田梨那, 고쿠시칸(国士馆)대학교 문학부 교수)

일시: 2013년 10월 30일(수) 18:30~20:30

장소: 호세이대학교 이치가야 캠퍼스 보아소나드 타워 25층 B회의실

사회: 왕 민(王敏, 호세이대학교 국제일본학연구소 전임연구소원, 교수)

귀모뤄(郭沫, 1892-1978)는 시인이자 역사학자, 고고학자, 고대문자학자 그리고 서예가이며 정치가이다. 그의 시집 『여신(女神)』은 중국 구어체시를 확립시켰다.

그가 일본을 방문한 것은 3번(유학시절, 망명시절, 1955년 방일)으로 당시 체류기간을 합치면 약 20년이 된다. 유학시절 귀모뤄는 일본에서 다양한 경험을 하였다. 특히 사토 도미코(佐藤富子)와의 만남은 그의 인생을 크게 좌우하는 사건이었다. 그녀를 만나 처음으로 자유 연애를 경험했으며, 해수욕과 등산을 체험하고 그

속에서 고향의 풍경과 자연을 발견하였다. 『여신』에 실린 많은 시는 대자연에 노래한 것이다. 일본 망명시절에는 매일 경찰에 감시당하면서도 중국 고대사회와 고대문자에 대해 연구하였다. 1937년 중일전쟁이 시작되자, 귀모뤄는 비밀리에 일본을 탈출하여 중국으로 귀국하였다.

귀모뤄에게 일본은 풍경의 발견, 자아를 눈뜨게 한 제2의 고향이다. 일본의 자연, 인문 환경은 그에게 현대 시가를 창조할 수 있는 환경을 제공하였다.

【기사집필: 후지타 리나(고쿠시칸대학교 문학부 교수)】



藤田 梨那氏 (国士馆大学文学部教授)

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）  
 国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討—〈日本意識〉の過去・現在・未来  
 アプローチ④「〈日本意識〉の三角測量—未来へ」

## 第 1 回勉強会

### 科学は普遍的か？

- 報告者：ジャン＝マルク・レヴィ＝ルブロン氏（フランス・ニース大学ソフィア・アンティポリス名誉教授）
- 日 時：2013 年 5 月 30 日（木）18：30～20：30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：安孫子 信（法政大学国際日本学研究所所長、文学部教授）

今回は、ニース大学ソフィア・アンティポリス名誉教授のジャン＝マルク・レヴィ＝ルブロン氏を招き、「科学は普遍的か？」と題して行われた。報告と質疑応答は英語で行われ、司会は HIJAS 所長で法政大学文学部の安孫子信教授、通訳は HIJAS の鈴木裕輔が務めた。

レヴィ＝ルブロン氏はフランスを代表する理論物理学者であるとともに、科学批判の立場から科学と社会や文化の関係についても多くの著作を発表しており、近著に *Le Grand Écart: La Science entre Technique et Culture* (Éditions Manucius, 2013) がある。

報告の概要は以下の通りである。

今日、政治組織や家族関係、創世神話、社会における歴史的な習慣、宗教と信仰、芸術と文学といった文化の構成要素が多様であるということに疑う人はまれである。しかし、近代科学について考えるとき、「科学的な理論は普遍的である」ということ、そして、「普遍的な理論を生み出した近代科学が西洋の文明や文化、とりわけギリシア文明、キリスト教、ユダヤ教に由来することから、科学は西洋にのみに存在する」という考えがしばしば前提されている。だが、科学は本当に普遍的なのだろうか。まず、江戸時代に発達した日本独自の数学である和算を例に考えてみよう。

和算は主として幾何学に関わっており、最も著名な和算家である関孝和は、ある面ではニュートンやライプニッツといった同時代のヨーロッパの数学者に先んじる成果を挙げていた。また、和算家や和算の愛好家たちの間では、額や絵馬に数学の問題や解法を記した算額を神社仏閣に奉納するという、独特の伝統があった。算額の奉納は数学と宗教との関わりを予想させるものの、ユダヤ教の数霊術のような宗教と数学の結びつきは見られなかった。あるいは、和算は、ユークリッド以来の西洋の数学が行ってきた原理の一般化や論理的な構造の確立という側面を欠いていた。さらに、17世紀以降、ヨーロッパの数学家は各種の国家機関を通して育成された専門家であったのに対し、和算家の多くは愛好家であった。その結果、日本では、ニュートンやその後継者が行ったような、数学上の成果が物理学、工学、医学などに応用されるということにはなかった。

次に原始科学の状況を考えてみよう。交易と工業に基づく社会が登場するまで、人類は原始科学的な技術が必要とした。集団の生活や秩序を維持するために自然現象を観察し、結果を理解することで、人類は植物学、動物学、天文学、数学、物理学の原型となる知識を得た。しかし、このような普遍的な基礎があったに

もかかわらず、原始科学の内容が多様であったことは、記数法を参照するだけで十分である。すなわち、原始科学においては、八進法、十二進法、六十進法などが用いられており、今日の標準的な記数法である十進法とは異なる体系が力を持っていたのである。また、数の勘定や分類辞も言語ごとに様々な種類があり、数学的要素が人間的、社会的な価値と対応していることが分かる。

言語については、西洋の言語と西洋以外の言語との間に存在する文化的な相違が、近代科学の用語にも影響していることに注意を払う必要がある。すなわち、ヨーロッパの言語の大半では、科学に関する術語は特定の地域の言語に由来するか、ギリシア語やラテン語をもとに新しく作られるかのいずれかであるのに対し、非ヨーロッパ言語の場合、術語の多くはヨーロッパの言語の翻訳であり、翻訳される前の術語とは異なる印象を利用者に与えることになるのである。

それでは、科学とは一体何であるのか。実際には、科学という言葉の含意は幅広い。原始科学は本質的には技術的、経済的、神話的、あるいは余暇的な活動と結び付いていた。しかし、科学という術語は、実質的な起源と一般的な使用方法から、少なくとも知識の抽象的で客観的なあり方に制限される。そして、古代ギリシアの数学は、実践的であるよりもむしろ哲学的であるという意味で科学の特徴を備えている。一方、古代エジプト人は様々な形の区画の面積を調べ、計算する方法を持っていたものの、計算方法の正しさを証明することはなく、あくまで実用的な動機に基づいて計算を行っていた。ただし、古代ギリシアの科学的な成果が近代科学に直結したわけではなく、8世紀以降、古代ギリシアやインドの科学を学んだアラビア人が工学、天文学、幾何学、医学の担い手となり、彼らが挙げた成果は、ヨーロッパの学者よりも数世紀ほど先んじていた。

近代科学と呼ばれるものは、17世紀初頭にヨーロッパに登場し、17世紀のヨーロッパという状況と密接に結び付いている。すなわち、政治的、社会的な圧迫からの解放と都市の職人たちの力の増大が、職人たちに手仕事と実用的な活動の機会を与えたのである。そして、技術の発展によって、機械の背後にある原理への関心が高まり、観察から実験が重視されるようになった。また、「偉大な神としての自然」や「自然の法則」という観念は、17世紀のヨーロッパ社会の政治的、宗教的な枠組みの中で生まれたものであった。

しかし、科学の発展を、安定的で継続的な進歩の連続として扱うことは誤りである。何故なら、中国やアラブ・イスラム文明の科学は、近代科学という大河に

流れ込む支流とみなすには、あまりにも近代科学とは異なる特徴を持っているからである。「科学」は単一のものではなく、「さまざまな科学」が存在するのであり、科学的な成果は時間的な制約を受けるということからも、科学的な成果の複数性を理解することができるだろう。また、科学が文明の発達に不可避であるとする考えも誤りであるのは、ギリシア人が残した科学上の成果を修得、発展させることなしに西ヨーロッパと地中海世界を数世紀にわたって支配したローマ帝国の事例からも明らかであろう。

さらに、科学は場所的な制約をも受けることは、地球外の惑星の深海部に知的生命体が生存すると考えるとき、人類が天文学から出発して科学を発展させたのとは異なる方法で科学を進化させるという思考実験の結果によっても示唆されるものである。

確かに、科学が普遍化されているという事実は認めなければならない。しかし、科学は永遠不滅のものではなく、思索と行動の結合という近代科学の特徴も、

歴史的には極めて例外的な現象であった。そして、今や生産性の向上と短期的な利益の確保のための手段となった科学は、衰退の道を歩んでいるかのようなのである。

しかし、どれほど科学を取り巻く状況が困難であろうとも、科学の役割やあり方を問うということは、明日の文明、あるいは諸文明のためにも意義があることなのである。

「科学は普遍である」という、われわれが無意識のうちに取りがちな態度の妥当性を問い、近代科学のあり方を比較文明的、比較文化的な立場から捉えるレヴィ＝ルブロン氏の観点は、「日本意識の三角測量」を試みる本研究アプローチだけでなく、日本そのものを相対的な視点から理解しようとする国際日本学にとっても意義深いものであると考えられた。

【記事執筆：鈴木 裕輔

（法政大学国際日本学研究所客員学術研究員）】



(右) 講演：ジャン＝マルク・レヴィ＝ルブロン氏  
(左) 通訳：鈴木 裕輔氏



司会：安孫子 信 氏  
(法政大学国際日本学研究所所長、文学部教授)



会場の様子

“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”  
Research Approach 4 “Triangulation of ‘Japan-consciousness’: into the Future”.

### 1st Study Meeting Is Science Universal?

Speaker: Jean-Marc Lévy-Leblond (Professor Emeritus, University of Nice Sophia Antipolis)  
Date: Thursday, 30 May 2013, 18:30-20:30  
Venue: Hosei University Ichigaya Campus, '58 Building 2F Research Center for International Japanese Studies Seminar Room  
Chair: Shin Abiko (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Literature)

This presentation questioned the pertinence of the assumptions that we unconsciously make when we say that “science is universal”. The main topics raised during the presentation were Wasan: Japanese mathematics that

achieve high-level results in geometry, prehistoric science which includes diverse content, methods of number calculation around the world that differ from the decimal system of today, and the coining of technical terms relating to science. We found that science is limited by time and place, is deeply connected to the society from which it emerges, and that the combination of thought and action is a phenomenon peculiar to modern science. Also, in the present day, science has become a means for improving productivity and ensuring short-term benefits. Lévy-Leblond’s view capturing the state of modern science from a standpoint of comparative studies in civilisation and culture was deeply significant not only for our research approach of “Triangulation of ‘Japan-consciousness’”, but also for international Japanese studies attempting to understand Japan itself from a relative perspective.

Report by: Yusuke Suzumura (Visiting Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

战略研究基础形成支援项目 研究方法④“对日意识”的三角测量——面向未来

2013年度第1次学习会

### 科学具有普遍性吗?

报告者: 吉恩·麦克利维·勒布朗(法国, 尼斯大学名誉教授)

日期: 2013年5月30日(星期四) 18:30-20:30

会场: 法政大学市谷校区 58年馆2层 国际日本学研究所讲习室

主持: 安孙子 信(法政大学国际日本学研究所所长、文学部教授)

此次报告,对“科学具有普遍性”这一我们无意识中所设定的前提的正当性进行了讨论。主要从以下几个方面

进行了说明:具有高度几何学成果且不受欧洲影响的和算(日式数学);包含多种内容的原始科学;与十进制所不同的世界各地的计数法;与科学相关的术语的制作方法等。其结论是:科学是受到时间和场所的制约的;科学和产生它的社会是息息相关的;思索与行动的结合是近代科学的特有现象。此外,还指出了现代科学为了生产能力的提升和短期利益的确保,呈现出了衰退的趋势。勒布朗教授从比较文明学和比较文化学的角度对近代科学的应有姿态进行了捕捉,不仅对“对日意识的三角测量”这一研究方法,而且对从相对性视点来理解日本的国际日本学也是具有深刻意义的。

【执笔者: 铃村 裕辅

(法政大学国际日本学研究所客座学术研究员)】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업(2010년~2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식> 재검토-<일본의식>의 과거·현재·미래

연구④ <일본의식>의 삼각측량-미래를 향해

제1회 연구회

### 과학은 보편적인가?

강사: 장 마르코·레비 루브론 씨(프랑스·니스대학교 명예교수)

일시: 2013년 5월 30일(목) 18:30~20:30

장소: 호세이대학교 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실

사회: 아비코 신(安孫子信, 호세이대학교 국제일본학연구소 연구소장, 문학부 교수)

이번 보고에서는 우리가 무의식적으로 생각하고 있는 ‘과학은 보편적’이라는 전제의 타당성에 대해 의문이 제기되었다. 보고에서 다룬 주요 주제는 유럽의 영향을 받

지 않고 고도의 기하학적인 성과를 거둔 일본의 와산(和算, 에도시대에 일본에서 발달한 수학), 다양한 내용을 포함하고 있는 원시 과학, 오늘날의 십진법에 근거한 기수법(記數法)과는 다른 세계 각지의 수의 산정방법, 과학과 관련된 슬어를 만드는 방법이었다.

그 결과, 과학은 시간적 장소적 제약을 받는다는 점, 과학을 낳은 사회와 깊은 관련이 있다는 점, 사색과 행동의 결합이 근대과학 특유의 현상이라는 점, 그리고 현재, 과학은 생산성 향상과 단기적인 이익 확보를 위한 수단이 되어 쇠퇴의 길을 걷고 있는 것이 아니냐는 점 등이 지적되었다. 근대과학의 나가야 할 방향을 비교문명학적, 비교문화학적 입장에서 파악한 레비 루브론 씨의 관점은 ‘일본의식의 삼각측량’을 시도하고 있는 본 연구뿐 아니라, 일본 자체를 상대적인 관점에서 이해하려고 하는 국제일본학에 있어서도 뜻깊은 발표라고 생각된다.

【기사 쓰기: 스즈무라 유스케

(鈴村裕輔, 호세이대학교 국제일본학연구소 객원학술연구원)】

## Japanese Civilization in the Modern World: an Introduction to the Comparative Study of Civilizations

Preface to the English Edition / NAKAMAKI Hirochika (v)

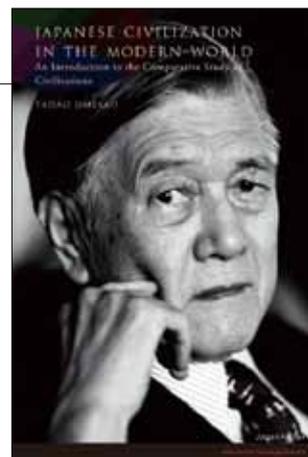
Table of Contents (ix)

Introduction to the Life and Work of Umesao Tadao / Harumi BEFU and Josef KREINER (xi)

Foreword / UMESAO Tadao (3)

Introduction / UMESAO Tadao (7)

1. Japanese Civilization in the Modern World: Culture and Civilization (15)
2. The Comparative Study of Civilizations: Cities and Urbanization - The Methodology of the Comparative Study of Civilizations (37)
3. Administrative Organizations and the Comparative Study of Civilizations: The Study of Civilization and the Study of Japan (51)
4. Economic Institutions and the Comparative Study of Civilizations: The Concept and Methodology of the Comparative Study of Civilizations (65)
5. Culturedness and the Comparative Study of Civilizations: The Tradition of Culturedness in Modern Japan (81)
6. Religion and the Comparative Study of Civilizations: Modernization and Religion (97)
7. The Comparative Study of Civilizations: Language and Writing (111)
8. Households in the Comparative Study of Civilizations (123)
9. Tourism and the Comparative Study of Civilizations: Tourism as a Phenomenon of Civilization (137)
10. Technology in the Comparative Study of Civilizations (151)
11. Amusement in the Comparative Study of Civilizations: Amusement Facilities and Systems (169)
12. The Comparative Study of Social Ethics in Civilization: Organizational Principles of Modern Japan (185)
13. Comparative Study of Transportation in Civilization: Civilization History of Transportation (199)
14. Information and Communication in the Comparative Study of Civilizations (213)
15. Alcoholic Beverages and the Comparative Study of Civilizations (231)
16. The Formation and Transformation of the Nation-State and the Comparative Study of Civilizations (255)
17. Collection and Representation and the Comparative Study of Civilizations (267)



### 【概要】

本書は、梅棹忠夫の『近代世界における日本文明：比較文明学序説』（中央公論新社、2000年）を英訳したものである。梅棹の名著『文明の生態史観』（1957年）の各論に相当する論考17編を収録している。

## ニューズレター NO.19 翻訳者紹介

（英語翻訳）

バーバラ・クロス（ロンドン大学 SOAS）

（中国語翻訳）

周 曙光（法政大学国際日本学研究所学術研究員）

（韓国語翻訳）

金 英美（法政大学国際日本学研究所学術研究員）

朴 庾卿（法政大学国際日本学研究所学術研究員）

**HOSEI 国際日本学研究所**

〒102-0073

東京都千代田区九段北 3-2-3 九段校舎別館 1階

TEL : 03-3264-9682 FAX : 03-3264-9884

E-mail: nihon@hosei.ac.jp

URL: <http://hijas.hosei.ac.jp>

